

HYOGO VISION 2050

未来を照らす

10000

の語り

兵庫県のビジョンは、「**県民が共にめざす姿を描く**」ビジョンです。

車座で、個別に、そしてオンラインで、

1万人を超える県民の皆さまと意見交換を重ねました。

そこでいただいた声から、なりたい姿を紡ぎ出し、

ひょうごビジョン2050を描きました。

未来に向けた県民の皆さまの思い。

「未来を照らす1000の語り」として、

めざす姿ごとにご覧いただけるようにしました。

ビジョンに流れる思いを感じていただければと思います。

目次

策定のプロセス

3

基本事項

4

I 自分らしく生きられる社会

① 自由になる働き方

21

② 居場所のある社会

33

③ 世界へ広がる交流

48

II 新しいことに挑戦できる社会

④ みんなが学び続ける社会

56

⑤ わきあがる挑戦

78

⑥ わきたつ文化

87

III 誰も取り残されない社会

⑦ みんなが生きやすい地域

93

⑧ 安心して子育てできる社会

110

⑨ 安心して長生きできる社会

121

IV 自立した経済が息づく社会

⑩ 循環する地域経済

129

⑪ 進化する御食国

139

⑫ 活動を支える確かな基盤

149

V 生命の持続を先導する社会

⑬ カーボンニュートラルな暮らし

155

⑭ 分散して豊かに暮らす

161

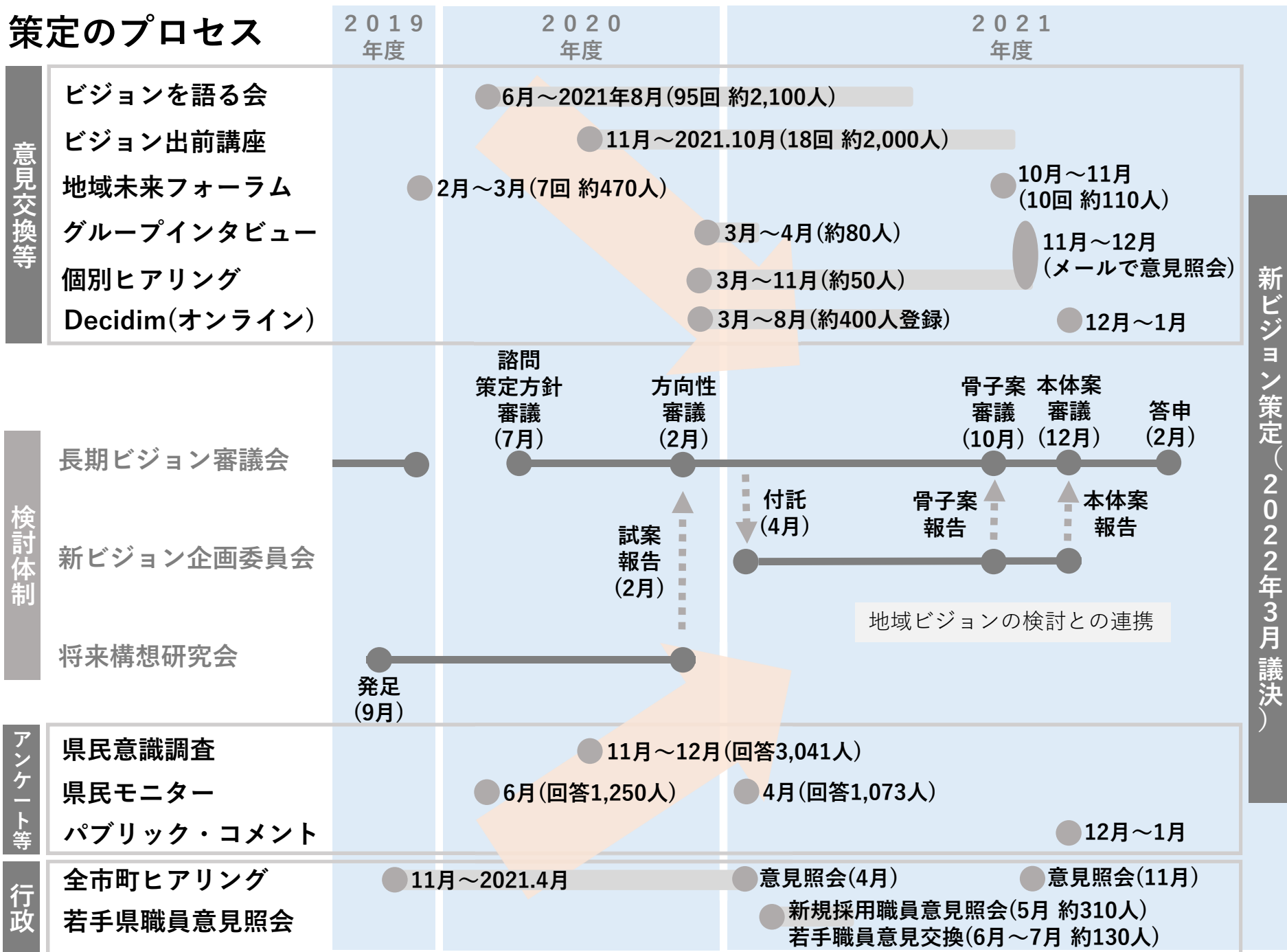
⑮ 社会課題の解決に貢献する産業

181

実現に向けて

185

策定のプロセス



新ビジョン策定 (2022年3月議決)

地域ビジョンの検討との連携

どんなビジョン
を望む？

どこかにあるものを持ってくる時代は

終わった。

私たちには、新しい暮らし方を発明し、

後世に伝える責任がある。

日本全体、あるいは世界全体の人々の考え方がこのコロナ禍で変わりつつある。そのような認識のもとに新ビジョンを作り、推進していく必要がある。

曖昧なビジョンは知らない。誰のため、何のためかがパッと伝わるビジョン、突き抜けた価値を示すビジョンがほしい。

他府県との差別化ではなく、もっと普遍的なものをめざすビジョンを期待している。

あいまいな
ビジョンは
知らない

他でできる事業はやらないということを徹底すべきだ。千年後にも影響を及ぼすビジョンを考えてほしい。

ビジョンで大事なものは、少々新たな事象が出てきても変わることのない骨太な価値を示すことではないか。

ビジョンで大事なことは夢や希望を思い切って描くこと。行き先が魅力のあるワクワクするものでなければ誰もついてこない。

大きく変わることを求めている人ばかりではない。新しいものを作ることだけが、将来に向かってのビジョンではない。

古い価値観はどんどん変えていかないといけない。でなければ、子ども達は帰ってこない。若い人、女性が社会をもっとリードしないといけない。

新しいものをつくるだけでなく、古いものを若い人と連携してつくっていくことで、高齢化の進む地域福祉の手助けにもなるし、全体の活性化にもつながる。

守るべき
ものは
守る

いろいろな部分で進む変化に対し、人の意識をアップデートする必要がある、そこをどう進めていくかを考える必要がある。

技術革新を前向きに捉えながら、どうしても変えてはいけないもの、守るべきものは守るという観点も大事にしてほしい。

コロナ禍の中で見えてきた社会の課題を念頭に、これまでとは異なる新しい価値観を重視し、創造性を発揮できる地域社会にしていってほしい。

全体のパイが減る中で、自治体間で人を取り合うことに意味はない。

人口が偏在しているからといって、人口を増やす必要があるわけではない。

大事なことは、実現不可能な人口目標を掲げるのではなく、どう人口減少に備えていくかを議論することだ。

地域間で競わせて、勝ち組のまちに人が集まるといふ競争の先に何があるのか。

人を増やすことにいつまでこだわるのか

起業家を誘致しているが、よくあるICT関係の仕事はどこでもできる。そうした仕事はたいてい小規模なので、人口を増やすという意味での効果は限定的。

政府は出生率を上げると言うが、出生率の回復に成功した国はほとんどない。女性が働くようになると出生率は下がるもの。世界を見ると、人口減少を解決するのは移民しかないということははっきりしている。

背伸びをしない。無理な目標値は設定しない。いつまで人口の話をしているのか。そういう発想自体を変えないといけない。

人口が減る中でも経済的に成長できるような社会構造を模索すべきだ。

人口が減っても楽しく生きられる社会を作るべきだ。

もう人口の競争はやめてほしい。そこに住んでいる人がいかに幸せになれるかを考えるべきだ。

そこに
住んでいる人
の幸せを

なりたい地域の姿をまず描き、そのために何をするかを考える。その際の障害の一つとして人口減少を考慮に入れるという順で考えるべきだ。

人口減少の話はもういいのでないか。関係人口の話ですら「増やす」という議論になってしまっていることこそ、危惧すべきだ。

人口は減少してもみんなが幸せに元気に暮らせる地域を維持していく、このことに主眼を置いたビジョンにしてほしい。

行政のビジョンではなく、県民のビジョンであれば、価値観とともに創ろうというスタンスが基本にあるべき。

当事者の発意
を大事に

県の参画と協働が言葉だけになっている。まずは当事者の声を聞く姿勢を取り戻してほしい。それがあってこそ県民との間に開かれた相互理解の関係を作ることができる。

当事者の発意を大事にすること = 自治であり、それが自治体の施策の出発点であるはず。

救うべき人の声を県がきちんと聞いていないという現状がある。

2050年に活躍するのは今の子どもたち。ワクワクしたものを作らないと子どもたちが困るので、責任を感じる。

30年後の社会を担う今の若い人たちが、なるほどこうなるといいなあと思えるビジョンであってほしい。

もっと尖ったビジョンでよい。特に2050年の現役世代である、今の若者をメインターゲットにしたメッセージの部分は、尖らせて主張した方がビジョンとしての価値が出る。

日々変化していく生活の中で一番適応する力を持っている10代、20代の若い人たちが新しいまちづくりの第一線で活躍できる環境になってほしい。

若い人に響く
ビジョンを

やはり若い人たちに響くようなものであってほしい、なぜなら未来を作るのは若い人だから。

既存の価値観に縛られた「安定」ではなく、変化を恐れず柔軟な思考ができ、それが反映されるような社会をめざす必要がある。

兵庫の良さは、阪神・淡路大震災を機に、県と市町が参画と協働のまちづくりをやり始めたこと。何と云っても、この歴史があることが強み。

ここじゃなくてもできることをここですべきではない。もっと明確に色分けしてやっていくべきだ。

「みんなで共有する」が均一化するということであってはいけない。各地域のビジョンの違いを整理し、際立たせるのも全県ビジョンの役割だ。

地域の濃淡が
魅力

私は自分で日本海まで車で飛ばしていくのが好きだが、山を越えながら、これが全部兵庫県だと思うと、すごいなといつも思っている。

県内各地に濃淡があるからこそ素敵な県になるのであって、集中から分散へとベクトルを言うだけでは不十分だ。

各地域の特色を地域ビジョンの中身に展開していければ、楽しいものになるのではないか。

いろんな個性の地域があり、それらを組み合わせることで一つの兵庫県としてよいものになる、ということを含めた全県のビジョンとして示さなければならない。

地域の個性を
組み合わせる

それぞれの地域が一番よいと思うことをめざすことが、兵庫県にとって一番よい。日本海、瀬戸内海で気候が違うように、各地域で人々が大切にしている文化が違うので。

地域ごとに多様な歴史や由縁などのストーリーが眠っている。それらを見直したり、再発見したりすることによって、人々の共感を呼ぶ流れをつくっていくべきだ。

今では考えられないような未来や、読んだ人がワクワクして「それやりたい!」と思ってもらえるビジョンであってほしい。

住んでいなくても、その地域が好きで関わりたい人はウェルカムという形にしていくことも大切だ。

地域を支えるのが、その地域に住む人だけではなくるとも感じている。「もうひとつのふるさと」のような仕組みができればよい。

関わりたい人
ウェルカム

兵庫県のビジョンに共感し、新たに国内外の多様な地域から集まってくる方々を歓迎する。そんなビジョンを描きたい。

新しく入ってきた人に地域の良さを理解してもらってコミュニティに参加してもらい、新しい兵庫、新しい地域のエンジンになってもらいたい。

自分たちでつながりあう。多様性を認め合う。結局そういうことを地道にやっていくのが幸せへの近道だ。

自分を出しても他者に迷惑がかからず、他者を尊重しても自分が出せるように、多様な選択肢の組み合わせがある社会であってほしい。

自分にとって
何が幸せかを
選ぶとる

自分にとって何が幸せなのかを選ぶとることが大事ではないか。

固定観念に囚われない生き方を選択する人が増え、個性や多様性が受け入れられる社会を実現したい。

経済活性化を言い続けて私たちの生活は幸せになるのか。この問いが、今後一層重要になる。

幸せに生きるためには、心の余裕が必要だと実感した。自分のためにも家族のためにも、なるべく心にゆとりを持って生きていきたい。

経済効率ばかりを優先するのではなく、非常時に対応可能な余裕の持てる規模が必要である。

「余裕」が
大事

効率的なことが良いことなのか。ゆとりある生活に変化することが望まれる。

仕事第一、出世第一、お金第一の生活はしんどい。余裕のない生き方では心も貧しくなるのではないか。少し余裕を持つことで人間らしくなれる。

都会でのハードワークで体を壊した経験などを通じて、エゴの渦巻く資本主義社会の闇を感じ、田舎での自然と調和した生き方を求めている。

みんなと同じでなければならないという雰囲気から解放され、個々人に最適である過ごし方が浸透していくのではないか。

お金ではなく、人のつながりを大事にする社会を構築するビジョンを描こう。

つながりを
大切に

地域に住むみんなが協力し合う、小さな公共が求められている。

自己も他者もひとつの命。互いに認め合うことで、横のつながりを大切にして「共創」できる未来をつくれる。

今の社会は将来の持続可能性といった観点で物事を考えていないようだ。そのためにも明確なビジョンが必要。

経済第一だけでは豊かにはなれない。動植物を含めての地球であり、コスト第一では静かに滅びていく。

人間性の
豊かさを
求める社会へ

経済成長を前提とする「経済の豊かさ」を求める社会から、「人間性の豊かさ」を求める社会へと転換してほしい。

命を守ること、経済を守ることと合わせて心を守ることが必要。

効率を求めるばかりでなく、時に非効率だが行いたいこともある。時には時間を割いて非効率なことも展開することが大切。

人とのコミュニケーションも無駄と言えば無駄なことがよくある。効率化ということで、いろんなことを無駄として省いていく流れの中で社会がバラバラになってきていると感じる。

非効率だが
行いたい
こともある

便利よりも、人間らしく、自然の恵みを享受できる暮らしの豊かさについて深く考えた。

コロナ禍で「不自由」な毎日を送った経験から「自由」はルールを守ったうえで享受できるもの気付いた。皆がこのことを再認識するべきだ。

不自由さの中で、本当に必要なもの、必要なことがなんとなく実感できた。日々の消費中心の生活を反省した。

今人々は案外自由ではない。いろいろな制約の中で生きている。その制約を少しでも取り払った地域が、人々にとってよい地域、暮らしやすい地域になる。

若い人に入ってきてもらうには、田舎の開放性を高めないといけない。新しいことをしようとすると足を引っ張られることも多いので。

いろいろな多様性を持った市民が集まっていることが兵庫の強み。「多様性」がありながら「開放性」のある県という方向性は非常に兵庫県らしい。

地域の開放性を高める

コミュニティが古くて、新しい活動ができないという話をよく聞く。地域という場の開放性を高めることが大きな課題だ。

第一に多様な個性があること、第二に排他的でなく、他人を受け入れるキャパシティを持つこと、第三に昔から大陸との交流があり、近代には神戸港が西洋の窓口になり、進取の気風に富んだ社会であること。こうした県の特徴を活かしてほしい。

今あるものをどう変えるかを示すのがビジョンの役割。若者のチャンスを潰している社会の構造をどう変えるかが大事なポイント。

今後どう変わるかは予測困難。どうしたいかを先に考えるべき。新しい技術で暮らし方や働き方をどう変えたいかを考えよう。

状況は常に変わるものなので、前に戻るのではなく新しい未来をめざして進むべき。

予測困難な
中では
どうしたいかを考える

若々しさを打ち出し、既成観念を打ち破るビジョンを示しつつ、県民の不安な気持ちに寄り添い、最期まで安心して暮らしていける社会をつくるビジョンを示すことが大事だ。

東日本大震災の被災者はダメージを受けた人の方が希望を持つ割合が高く、その人たちは何か行動を起こしている人だという。鍵は「希望」ではないか。

どんな働き方
を望む？

渡り鳥のように

そのとき一番気持ちのよい場所で働きたい。

働く場所、働き方を変えると効率も上がる。

それができる社会になってきた。

1 自由になる働き方

生きるために働き続けてきた時代が遂に終わり、人間は何のために生きるのか、何をして生きていくのかが問われる時代になるだろう。

食べていくために必要な労働以外の、自分なりの価値を見出すための労働がこれから増えていくだろう。

人が一番輝いているときは、自分の好きなことを楽しんでいるとき。

やりがいを
追求できる
社会へ

日本人は仕事をしすぎなので、楽しく生きようという一言につきる。

どうやって生きていけばいいかわからない中では、一つに的を絞らずに、何個も可能性を持っている方がよい。

これからの時代は、やりがいや楽しいことが大事。みんながやりがいを追求する社会になっていくはず。

1 自由になる働き方

今の若者が求めているのは、役立つ仕事、充実感のある仕事、自分が成長できていると感じられる仕事だ。

若い人に定年まで同じ企業で働くという意識はない。できる限りソーシャルな取組に関わりたいという思いが強く、そうした方向で雇用の流動化が進む。

労働参加率を上げるという観点の議論ではなくて、いかに自分らしく働くかという観点で議論しないとイケない。

いかに
自分らしく
働くか

仕事の評価軸が時間から成果に変わり、1日8時間労働の世界が終わる。1日3時間で仕事を済ませる人は、それ以外の時間で別のことをするようになる。

所得を上げることよりも、所得が低くても幸せな生活を志向する若者が増えているのは間違いない。その意味で自分時間の拡大、ワークライフバランスなどが一層大事になってくる。

今の若い人は出世というよりは平穩に自分のペースで仕事をして自分の時間を大切にする暮らしを望む人が多いかもしれない。

1 自由になる働き方

今は生活のために働く感覚が大きいですが、これからは人生を楽しむために働くという世界観になっていってほしい。

みんなが勝手に楽しむ権利、楽しむ自由を持っている。その自覚のない人があまりにも多い。

人々が自由に選べる仕事の選択肢は思っているよりもずっと広い。

人生を
楽しむために
働く

フルで働き続けられないといけない社会は望まない。社会で活躍することもできるし、自由に生きることもできるという選択の幅を持たせるべき。

みんながやりがいをもって社会参加し、みんなが社会に貢献していける、そのような社会づくりが進んでいるのではないか。

1 自由になる働き方

在宅勤務が一般化すれば、地域のコミュニティとの関係性が重視されるようになるだろう。

働き方が自由になれば、田舎暮らしも増える。

リモートワークは普遍的な働き方。これが広がれば、いろいろな人がもっと能力を活かせるようになる。やっと進みだした。決して元に戻してはいけない。

テレワーク
前提の働き方
が一般的に

中小企業もテレワークできるようになってほしい。

働く＝出社するではない働き方が普通になってほしい。

残業が美德という人が、これまでは多かった。リモートを活用して効率的な働き方が広がってほしい。

週休3日制になれば新しいことをしやすくなる。

1 自由になる働き方

好きな場所で好きな人と仕事をする。それが一番ストレスフリーなのではないか。

自分の望む場所で仕事ができれば、人生の選択肢は広がる。

働く場所を変えることで、働き方のメンテナンスを行うことができる。

好きな場所で
好きな人と
仕事をする

軸になるような自分の役割—例えば歯科医という役割—を持ちながら、他のいろんな役割と組み合わせていけるようにすることが大事だろう。

一斉に通勤、一斉に休暇という習慣はなくなってほしい。労働時間でなくジョブ（職務内容）による給与が定着してほしい。

多様な働き方ができ、一人ひとりにあうそれぞれの働き方改革で、豊かな生活を実践できる社会づくりが大切だ。

1 自由になる働き方

働き方の大変革が必要。一斉就職をやめて、若者がいろんな経験しながら仕事を選んでいける社会にすべき。

親が自営業の学生が少なく、サラリーマン以外の選択肢が見えていない学生が多い。

サラリーマン社会では組織に入ると、基本的に自分で意思決定してはいけないということを学ぶ。

サラリーマン
以外の仕事を
選択肢を

今の学生にとっては、同じ企業に勤め続けることよりも、そこでどんなキャリアを築けるのか、どんな生活ができるのかが重要。

バラバラな個人を社会に結びつける機能が職業にはあったはず。しかし、今の学生は、社会のためというより、会社のために働くという感覚が強い。

個人の意識の切り替えは速いのに、組織では慣性の力が働き、変化に時間がかかる。その結果、脱組織化が進んでいる。

1 自由になる働き方

組織に属さない個人の活動が、
いろんなネットワークの中で展
開される世界になっていく。

会社員になること以外の選択が
できる環境づくりが大事。

一つの組織に縛られると考える
力が衰える。

フルタイムの働き方は将来なく
なってほしい。

組織に
縛られない
働き方へ

副業が広がれば会社に依存しな
くてよくなる。

組織に忠誠を誓う組織人から、
職業に忠誠を誓う職業人の時代
になっていくだろう。

今起きているのは組織に背を
向ける動き。勢いのある人ほど
組織に属さないで活動する。

当社は従業員ゼロ。目的に共感
してくれる人とチームを組んで
仕事している。それで十分。

1 自由になる働き方

組織と個人の関係が希薄化し、個人がフリーな状況に向かう。その人がどんな資本を持っているかがこれから一層重要になる。

一つの場所で生まれ育って一つの職場でキャリアを重ねていくよりも、一人の人生の中で、いろんな場所でいろんなライフスタイルを経験できたらいい。

自由になる働き方では、能力開発が重要。大事なのは、学びと活動の循環である。

大事なのは
学びと活動の
循環

終身雇用制度があるから能力が向上し続けられない。

正規非正規の格差がない雇用を促進すべき。

男女ともに派遣・契約社員などの不安定な非正規雇用の増加が食い止められ、年齢を問わず、希望者が正社員になれる社会になってほしい。

1 自由になる働き方

失業した人がすぐに就労できる環境や、職業訓練のような場を充実していくこともセーフティネットとして重要だ。

スムーズに職業の転換ができるような再教育の仕組みがある社会になってほしい。

リスタート
する人を
受け入れる
社会づくり

機械化が進んだが労働時間は減っていない。AIに仕事を奪われても、また新しい仕事が生まれると考える方が自然だ。

職業訓練や新しい仕事への転換のハードルを下げる仕組みなど、リスタートする人を応援する社会づくりが進んでほしい。

1 自由になる働き方

時間を金に換え、その金で地域や家族の機能を外部化する。これでは仕事から逃げられない。これからは逆に生活費を下げて、働く時間をどこまで小さくできるかに挑戦する人たちが出てくるだろう。

家族のあり方は労働のあり方と切り離せない。日本の家族の問題は、日本の長時間労働の問題とセットで考えるべきだ。

いろんな
ライフスタイル
を考える

仕事はもちろんだが、趣味、人のつながり、地域活動など、いろんなものを含めたうえで、ライフスタイルを考えていく必要がある。

リタイアすると、生きがいがなくなってしまう人が多い。仕事でなくても、趣味でもよいので、何かに打ち込めることが必要。

シニアが働くのはいいが、もっとわがままに働ければいい。新隠居、半隠居、半休半業など、戦略を練る必要がある。

1 自由になる働き方

働き方も住まいも、ずっと一か所という社会ではなくなっていくと、人に情報のタグをつけ出すだろう。

住む所と働く所が一つになり、しかも場所に規定されなくなる。好きな場所を転々として暮らす人が増えるだろう。

仕事を選ぶと自動的に住む場所が決まる時代から、どういう場所に住み、どういう暮らしをしたいかを考えて、それに合った仕事を選ぶ時代になる。

多様性に
富んだ兵庫の
好きなところで働く

皆が多様性に富んだ兵庫県の好きなところで働き、充実した家庭生活を送っている。

ライフステージに合わせて働く場所、住む場所を選べる社会になってほしい。移動がもっと簡易に迅速にできるようになれば、仕事や住居の選択肢が増え、より豊かな生活が送れる。

働き方や家族のあり方、会社や学校ありきではなく、どこにいても働き、学べる環境が必要。

**居場所は
なぜ必要？**

家族のそばで暮らす人も、

離れて暮らす人も、家族がいない人も、

それぞれがつながり、地域に居場所があると

安心感を得られる。

自分の居場所を探しても100%合うものは見つからないので、自分で居場所をつくった方が早い。

身近に人が集まれる場所が必要。月一回とかではなく、いつでも気軽に行ける場所が身近にあればいいと思う。

自力でサードプレイスを確保できない若者と高齢者の居場所確保が公共の役割として重要。

いつでも
気軽に行ける
場所が身近に
あればいい

自由に自分自身が出せるくつろぎの居場所が持てると、精神的なゆとりが生まれて、人生をより豊かに過ごすことができる。

高齢者と働く世代がともに活用できる複合的なサードプレイスをつくる必要がある。

一人で寂しい。人と気軽に話せる場所がほしい。

2 居場所のある社会

地域で人が集まれる場所をもっと増やし、コロナ禍で過密と感じた公園の状態が緩和され、公園を選べるまちづくりを望む。

公共施設が充実しており、コワーキングスペースや多目的スペース、ヨガなどの運動が自由にできる広場がある。

自宅に代わる一人時間を楽しめる場所として、マンスリーマンションをシェアする都会別荘や、キャンプ場、バーベキュー場などの貸し切るができる場所が増えてほしい。

地域に人が
集まれる場所
をもっと
増やす

商店街、市場はもはや物を売るだけの場所ではなく、コミュニケーションを楽しむ場所だと思う。

廃校や歴史的建造物をおしゃれにリノベーションした大規模なコワーキングスペースを設置する。1つの拠点に様々なフリーランス、ビジネスマン、クラフトマンが集まり、イノベーションが創出される。

まちの中にいろんな交流の場があれば、そこから思いもよらないつながりが生まれていく。

孤独・孤立の当事者の状況にもっと目を向けないといけない。制度が届かない人、制度はあっても情報が届かない人、情報が届いても行動に移せない人が山ほどいる。

地域のつながりが薄くなることで、地域の中で困っている人が見えにくくなっている。

マンションに引っ越したら、地域とつながるきっかけがないまま一年が過ぎた。

人を孤立
させない
環境をつくる

孤立無援にならないように、元気うちから趣味を持ち、会社以外に居場所を作る努力を個々人がすべき。

人の温かさを体感できる場、人を孤立させない環境を自分たちが暮らす地域でどう作っていくかということを、もっとみんなが考えないといけない。

人と人との結びつきが希薄になり、殺伐とした社会になってきている。

働きながら一つでも何か仕事以外の活動をするのが、歳を取って別の動きをしていくときに生きてくる。

釣り、ゴルフ、キャンプ、シーズンスポーツなど、趣味を持つ人々が快適に暮らすことができ、同じ趣味を持つ人とも交流できる地域になれば、住みたい人が増える。

新しい
つながりが
生まれる場
をつくる

これからのつながりは、全人格的なものではなく、もっとフレキシブルな緩いつながりをイメージした方がよい。

大事なのは昔あったつながりを再生することではなく、新しいつながりを作ることだ。新しいつながりが生まれる場をあちこちに作っていくことが大切だ。

狭い関係性の中で安定してしまうのではなく、つながることには不安もあるが、面白さ、楽しさもあるとわかる環境をどう作っていくかが課題。

地域にいろんな人が育ってきているのに、それが見える化されていない、誰とやったらいいかわからないという人が多い。

趣味から新しいコミュニティができる。そんな新しいコミュニティのつながりがこれから先、自助に頼らない社会をつくることにつながっていくのではないか。

つながる意味は何か。大事なのは「連帯」であり、人と人のつながりが課題解決の力を生むというところが大事なポイントだ。

自分たちが
楽しいことを
やることが
大事

人は楽しいことしかやりたくない。自分も楽しくなければやっていないし、楽しくあるべきである。

自分たちが楽しいことをやることが大事で、良い雰囲気を作れたら、そこに人が集まってくる。

都市の地域コミュニティを元気にするためには、若者にとって、関わるのが面白い、新しいことを学べる、新しい知り合いができる、そんなコミュニティに変えていく必要がある。

新しい人が入ってきた時に受け入れていくような交流のできる場所があったらよい。

価値観を共有する人たちと作るオンライン上での結びつきが、その人にとってのリアルなコミュニティになっていくだろう。

バーチャルなコミュニティは敷居が低く、オンラインなら参加できるという人もいる。

オンライン上
の結びつきが
リアルな
コミュニティに

最新のテクノロジーは、SNSを含むバーチャル的な新時代のつながりに加えて、旧来の人間同士のつながりさえも生み出す鍵となる。

自分らしさを見つけたり身につけたり、他者との関わりの場を増やすことが、自分らしさを増大させることにつながる。

サードプレイスを持つことで、異質な人と共に過ごす力、自律的に活動できる力などを養うことができる。心身のリフレッシュ、自己肯定意識の向上が期待でき、孤独感の解消にもつながる。

折れない心や強い心のもとになる「心理的資本」はコミュニティの中で多く蓄積される。心理的資本を育む場となる「サードプレイス」の存在が重要になる。

つながろうと
意識する

人と出会うこと、人と話すこと、家族がいること、誰かと一緒に過ごすことの大切さをもっと学ぶ機会を持つことが必要。

地域にはいろいろな考えの人がいるので、いろいろな人が入って来やすいように間口の広いフラットな場を作る必要がある。

つながろうと意識している人が多い地域には、自然とつながりが生まれる。つながりがあれば不安が減り、不安の少ない地域には人が集まる。

縁を増やすにはたくさんの人と
関わる機会を増やすしかない。

どのようにすれば自分も相手も
気持ちよくつながれるか、つな
がり方を学ぶことも大切。

出会いがきっかけで、新しい価
値観が生まれたり、自分らしく
生きることができるようになる。

お互いに
興味、関心を
持ち合える

縦や横につなぐ。世代をつなぐ、
場所をつなぐ。同じ世代で共通
するものでつながる。何かきっ
かけをつくるとつながりやすい。

お互いに興味、関心を持ちあえ
る社会になることが大切だと思
う。いくら素晴らしい技術や素
敵な施策ができて、お互いの
関心がなければ成り立たない。

人間的なつながりが重視される
社会をめざす。

子育てが落ち着いたら、地域の
子どもの学習支援や子ども食堂
などの活動で地域とつながって
いきたい。

地域で活動したい若者は確実に
増えているが、固定的な考え方
を持つ声の大きい人の意見で進
んでしまう地域がまだまだ多い。

若者もしっかり自分の将来のこ
とや、地域のことを考えている。
地域の中に多世代での交流の機
会があることも大事だ。

一歩
踏み出せる
場をつくる

関係を広げる場はすでにくら
でもあるわけなので、一歩踏み
出せる環境をどう作るかが大事。

保守的なシニア層が若者を潰す
という話もよくある。若い人が
何か新しいことをしようとする
と、まず地域のシニアとの軋轢
が起こる。

使っていない土地などを広場や
公園にし、誰もが楽しく参加で
きるスポーツイベントやバザー
などができれば、多世代が交流
する場となる。

NPOは、事業をする以外に、参加者にとって居場所になるという意味がある。

人間同士の支え合いが生きている地域が強いとわかっているからこそ、ボランティア活動を大事にする必要がある。

今の若者はつながりがありすぎの中で維持不要の関係は何かという「引き算」で世界を見ている。捨象される部分に地域やNPOが入らないようにしないといけない。

NPOは
参加者にとっての
居場所

NPOの本質は非所有であり、みんなが参加するということ。通常会社と違って効率性で動く組織ではないことを認識する必要がある。

NPOは住民が組織する団体である。市民のニーズを吸い上げる機能を担っており、その存在自体に価値がある。

地域で活動するということは人とのつながりを作ることだ。

公民館が担ってきた社会教育の活性化を通じて、地域のコミュニティを再構築する方向を考えるのが現実的だ。

いろんなサイズのコミュニティが重なり合って補い合う形を作ることが大切。

コミュニティ
に新しい価値
を持たせる

地域コミュニティは、地縁型からクラブチーム型に変わっていくだろう。多様な人が多様な関わりを持てるデザインが必要だ。したい、したくないという選択もできるようにすべきだ。

田舎でも魅力的だと思ったら帰ってくる。コミュニティを再構築して新しい価値を持たせることが課題になってくる。

人口減少下の地域づくりは「つくること」よりも「つぶすこと」から進めるべきだ。骨組みだけ残して新しい活動をしやすい体制に変えていくことが大事。

2 居場所のある社会

自治会が非常に封建的。権利意識の強い人も多く、新しい展開をしたがらない。そんな場に、若い人や街に働きに出ている人は出てこない。

地縁組織の支援は、外から変えようとするのではなく、中からもっとよくしたいという気持ちを引き出していくことが大事だ。

緩やかなつながりが大事なのに「誰がトップだ」「規約はどうなっている」とうるさく言う人がいる。地域に若手が参加しないのは、そういうのがしんどいからではないか。

風通しのよい
地域に若者は
集まる

自治会、まちづくり協議会が何をやっているのか、外から見えないところが大半。そういう地域は見えないままになり、見えやすいところに若者が流れる。

活動したい若者が増えているが、閉鎖的な地域が多く、若者を引きつける地域とそうでない地域の二極化が起こっている。

地域活動のベースは自治会ではなくなってきている。そもそも自治会に入っていない若い人が多く、自治会に入らずに地域活動をしている人も多い。

世帯単位ではなく、個人単位で参加できる自治協議会の立ち上げを進めているが、若い人が入ってくると、「若い者が生意気を」という人もいて、なかなか難しいところもある。

年配の方々は、ボランティアが来てくれない、と言って悩んでいるが、労働力として使われたくないという若者の気持ちも分かる。

ポイントは
楽しむこと

ボランティアだとしても、お金じゃなくても何か得るものを持って帰りたいという思いを叶えてあげないとお互い悲しい結末になる。

ポイントは楽しむこと。住民の参画と言っても、住民に義務感や使命感を求めるだけでは限界があって、地域離れが進む。

自治会長や民生・児童委員のなり手がいない。地域の希薄化が進み、自治会の組織率も下がってきている。自治会を解散したいという相談が毎年ある。

消防組織すら維持できない。集落内の地域活動が困難。

事業所数が年々減っており、商工会の加入率も下がっている。

コミュニティの単位は、いろいろ試したが、やはり小学校区が一番よい。

地域に
コミュニティ
がなく断絶感
がある

若者や外国人には自治会はミステリアスな存在。女性の役が仕事だと免除されないみたいな変なルールがある。地域の側も変わらないといけない。

地域にコミュニティがなく、断絶感がある。

学校の統廃合により地域社会の分裂が進む。

どんな交流
を望む？

五国を横断する、

人と人とのリアルな交流や関わりが

あってこそ、兵庫県として存続する

意義がある。

但馬は芸術の街、播磨は医療の先端を走る街、丹波は世界に誇る農業の街、淡路は日本のサテライトオフィスの街、摂津は異文化の街として新たな魅力創出につなげる。

地域にはそれぞれ強みがある。地域間で競争するのではなく、手を組んで世界の中で有名な兵庫になるくらいの気持ちでやっていく方が楽しい。

いろいろな
地域カラー
を持つ県

いろいろな地域カラーを持っているのが兵庫県のすごさ。都会もあれば、山も海もある。

何もないのではなく見えていないだけ。自分の住む場所が実はそれなりに面白いんだということを再認識することが重要。

県内はどこも行ってみるとめちゃくちゃいいところだ。それに意外と近い。

「癒しの国」日本の温泉が世界から注目され、その中でも「兵庫県の温泉が一番だ」と言われるようになってほしい。

地方に多い廃校跡は工場にしたり、レストランにしたり、沿岸部に多い工業遺産の造船所跡などはジャズを聞ける場所にしたり、アイデア次第でいくらでも新しい使い方は考えられる。

見る観光から
深い体験を
求める観光へ

インスタ映えするスポットを教えあったり、学生がまち歩きをしながら魅力を発信するなど、もっと地域の魅力を共有すべき。

見る観光から、より深い体験を求める観光に変わることは確か。

農業でも、地域によっては、観光農業に振り切って、土地の有効活用をしていくような戦略もあってよい。

卒業後も日本にいたい、日本で働きたい、日本のために働きたいという留学生がいるので、その面での国際交流や、県内での国際企業の発展が望まれる。

住民という意味では、兵庫県の人口の中に外国人の人数も含まれているわけだから、この方々が誰一人取り残されない社会をつくらなければならない。

たくさんの国の人たちが地域の産業を支えているという事実があまり知られていない。

世界が
憧れる
県に

海外から来ている、将来母国の科学技術を支える博士研究員などの高度な人材を兵庫で育成するというビジョンがほしい。

技能実習生は1～3年で入れ替わるが、一時的ではあっても市民であることには変わらないので、気持ちよく住んでもらえるようにしないといけない。

アジアの若いアーティストが集まってくるような、その文化に世界が憧れる兵庫県をめざしてほしい。

日本人が外国人を支援するだけでなく、日本人も頼ったり助けられたりして「支え合う」視点が必要。「多文化共生」より一つ手前に「交流」が必要。

立場の違う人
との交流が
大切

外国人と日常的に接触している人ほど排他的な行動を取らないとされる。立場の違う人との交流が寸断されることで、異質なものの、異なる考え方を排除する風潮が強まらないか心配だ。

地域に増加する外国人の方が、違和感なく地域の担い手の一人として必要とされている社会になればいい。

多様な文化の人と混じり合っ
て育つことが大切。

常識を壊す体験をすることが大事。多様性に触れる必要があり、その意味でアートや自然、外国人と関わる体験が重要。

世界の一体化が進み、多様な価値観への理解が広がり、アイデアが生まれたり、イノベーションの機運が高まる。そんな未来を望む。

UJIターンの人、海外の人などを混ぜて、ダイバーシティの高い職場を作らないといけない。

多様性に
触れる
体験を

当たり前を疑い、自分の頭で、なぜそうなのかを考える。それがダイバーシティの本質だ。

いろんな価値観を持った人材が混在していないと、地域の持続的な発展は難しい。

世界の情報を知ること、日本のことを知らない外国人と交わることがいかに大事なことを知る必要がある。

インドや東欧など伸びつつある地域に行き得た情報を活かすことができれば、先端と伝統が融合した、日本でもトップレベルの産業県になると思う。

国内外との交流によって、県内にプロフィットが生まれるという構造を再度作れないか。そのためには、海外から企業を呼び込む必要があり、閉鎖型ではなく、いろいろなものをオープンな形で進めていく必要がある。

世界に視野を
向けてくれる
プログラムを

海外には若い力がある。今後世界と連携して食糧問題など社会課題を解決するというビジョンも考えられる。

表舞台に出てこないが、世界で活躍している人がいる。そういった人がもっと増えてほしい。世界に視野を向けてくれるプログラムがあればいい。

世界の課題先進国である日本の課題解決のデザインを輸出する発想が大切。意識を少し変えるだけで、課題であったものが、輸出できるものになり得る。

日本人の生徒は、外国に興味
がなさすぎる。もっと外国の文化
に興味を持ってほしい。

グローバル社会では、周りの意
見に流されてしまうことが多い
日本人は、どんどん後回しにさ
れてしまう。外国人とコミュニ
ケーションをもっと取れるよう
にすることが大事だ。

海外に出て
新しい体験を

日本人も、世界を知ること
で人生が豊かになる。

海外の学校で学んだり、留学生
を呼んだり、もっと気軽にでき
るようになればいい。

海外に出て新しい体験を
することで自分の価値観が
変わり、多くの選択肢が
自分の中にできる。

どんな学び
の場が必要？

年齢、学歴、収入を問わず

平等に学べる場が必要。

それは人々の

居場所を作ることにもなる。

4 みんなが学び続ける社会

一番の問題は教育。ここにポイントを絞るべき。

学校教育を変えていかないと日本が危ない。

日本人のウィークポイントは当たり前を超える発想がなかなか出てこないこと。そもそもそういう教育がなされていない。古すぎる発想の根本には教育の問題がある。

人づくり
= 未来づくり

インフラ投資よりも将来の人を育てることが重要。

人づくり = 未来づくり。子どもの教育が一番大事。もっと税金を使ってよい。

4 みんなが学び続ける社会

日本の学校はいまだに受験勉強の場所に止まっている。学校が予備校みたいだ。

中学受験を経験したが、受験社会に閉塞感を感じる。今のような大学入試は本当に必要か。

公立校の詰め込み教育を改革してほしい。特に受験教育の変革が必要。偏差値重視の進路指導はやめてほしい。

個性を尊重し
自由な発想を
大切に

個性を尊重し自由な発想を大切に
にする社会になってほしい。その
ためには詰め込み式の教育を
やめないといけない。

今の学校は、教科の点数で評価
する部分が大きく、自分のやり
たいことで人に喜んでもらったり、
達成感を感じたりすることが
少ない。

4 みんなが学び続ける社会

大人自身をもっと自分らしく生きられるように、ある意味育てないと、いくら子どもの個性を伸ばすとか言ってもダメだ。

大人の価値観を変えないと、いくらいい施設や、いいサービスを提供しても、子どもの世界も、社会もよくなるらない。

子どもの問題の多くが大人の問題で、大人が変わらないと解決しない。まず大事ななのは、大人自身が自分と子どもが違う人間であることを認めること、子どもに自分の価値観を押し付けないことだ。

大人の
価値観を
変える

双子でも個性が違うのに、すべての人が一人ひとり違うという当たり前のことが分かっていない大人が本当に多い。

根本は家庭教育であり、お父さんお母さんの教育から始める必要がある。遠回りのようだが、その方が早い。

親にとって重要なことは、子どもを変える唯一の方法は自分が変わることだと気づくことだ。

4 みんなが学び続ける社会

良い大学に入って、大きな企業で働いてという、一般に良しとされる価値観をチェンジさせる必要がある。

「いい大学へ行って大きな会社に入って、出世することが幸せ」という、価値観は正しいのか。学校だけでなく、社会の価値観そのものを思い切って変えないといけない。

不登校の子どもたちは、人間を枠にはめようとする今の教育の限界に対し、一生懸命声を挙げてくれているのではないか。

社会の
価値観を
変える

小中高とありきたりの教育の中に押し込められて、受験で合格して大学に入った途端に自由にしなさいと言われても無理な状態になってしまっている。

子ども時代は、みんな同じでないといけない、という学校教育に息苦しさを感じていた。

今まで親と先生のいうことを聞くことが一番大事だと思って生きてきた。それが大学に入ると急に、好きな研究をしろ、どこの会社に入るかは自由だと言われて困る。

4 みんなが学び続ける社会

人の言うことをよく聞き、その上で最後に決めるのは自分というのが「自己決定」の本質だ。

所得や学歴より「自分で選択できること」の方が生活の満足度や幸福度とのつながりが強い。

自分らしさを追求することを教育するなら、ありのままの私でいい、ということを積極的に考えることがまず必要だろう。

「自分らしさ」は「自分勝手」とは違う。社会との調和を保ち、社会規範を守るからこそ自由が手に入るということを子どもに伝える必要がある。

自分で選択
することで
幸福に

もっと個性を尊重して伸ばす。自分の意見が言える。そういう教育をしないと、これからの時代に自分の力で生きていけない。

自分らしさを押し込めて仮面をかぶっていたりする状態で個性を伸ばせと言われても、それは難しい。

個が充実してこそ、他人にも優しくできる。

相手の立場に立って考える「エンパシー」が教育の中で身に付けば、世の中が変わる。

4 みんなが学び続ける社会

学校の先生はオンラインでできないことに特化した教育活動を行う方向で能力を高めたほうがいい。

科学的に立証された知識を学ぶ場、信頼できる情報や考え方に触れる機会、そうしたものが、オンラインでもいいが、ますます重要になってくる。

子どもが自分の興味関心から動き、自分のペースで探究できる実感を持てるようにすることが大切。それが、人やモノへの愛着、学びの意欲、生活全体の態度を自然と高めていく。

なぜ？
どうして？
を伸ばす

今見えているもの以外の課題を設定して、解決のために試行錯誤させる教育が必要。

小さい頃から、何かに興味を持って、それを探求していくことが少ない。子どもたちの「なぜ、どうして」を伸ばすことが大切ではないか。

「知識を蓄える、正解を見つける、ルールに従う」などの能力ではなく、「アイデアを生み出す、問題を見つける、個性を尊重する」といった能力が必要になる。

4 みんなが学び続ける社会

もっと伸び伸びとした教育で、
夢をつかみ取ろうとする若者を
育てていく必要がある。

いろんな枠組みから「はみ出
す」価値観が生まれたときに面
白くなるんじゃないか。

これからの時代に必要なのは、
真似ではなく、自分で考えて行
動する人だ。個性を伸ばした上
に創造力を育む教育、この教育
を大切にしていける必要がある。

「はみ出す」
価値観で
面白くなる

考える力、自発性、そして議論
を臆さない人材づくりというこ
とを一つの目標としてビジョン
で意識的、明示的に掲げないと
変化は期待できないのではない
か。

サラリーマンを作る教育から、
もっと多様な人材を育てる教育
に切り替える必要がある。問題
の根幹は初等中等教育にある。
内申書重視も問題だ。

4 みんなが学び続ける社会

AIは脅威だが、逆に考えればやることはシンプルで、AIが不得手なところを徹底して鍛えること、つまり教育が重要。問題は創造力や心の資本を持ち合わせた人材をいかにして増やすか。

世の中の急激な変化に対応できる人を育てることが大切。そのためには柔軟な考え方のできる大人、フラットな考え方のできる大人が必要。つまり教育自体に柔軟性を持たせてほしい。

教育に
柔軟性を

子どもができるだけたくさんの大人の多様な眼差しに触れることが大切だ。特にユニークな大人との出会いが重要。

得意不得意に応じた関わりが必要であり、個々の特性に合わせた学習環境の整備が大切。

個々の子どもに合わせた学びに変わることによって、教育のあり様が激変する。子どもたちの成長をどう考えていくかが課題である。

4 みんなが学び続ける社会

学校教育は標準化できる部分はオンラインで標準化し、個別のフォローをするのが先生の仕事という形に変えた方が子どものためになる。

オンライン化は、学習する意欲はあるが様々な事情で登校できなかったり、過疎地で通学が不便だったり少人数での学習しか体験できない環境にいる子どもを救うことにもつながる。

全県一律にクオリティの高い教育が提供できれば、場所に縛られることなく住めるようになる。

教育格差なく
同等の教育を

子どもが少ない地域でもICTを活用するなどして日常的に多くの人と交流できるような学習方法が行われ、どのような地域でも教育の格差はなく同等の教育が行われている。

教育で貧富の差が出る。そのことで子どもが悲しむことのないようにしないとイケない。

塾の費用が高額。貧富の差が子どもの将来に影を落とす。

学校が大事なのに不登校、いじめなど問題が多い。

4 みんなが学び続ける社会

様々な心動かされる体験を通して社会や地域への関心を高め、心の豊かさを獲得していく。

効率化によって生まれる余白を使って、人間らしいことを体験したり学んだりする教育にシフトする必要がある。

体験が子どものクリエイティビティを伸ばすことに気付いている親もいる。体験を通じた学びが家庭任せになると、格差が拡大し、固定化する。

人間本来の
五感を鍛える

子どもの野生復帰が必要だ。原体験を培うのは、外遊びや土に触れる経験。自然に触れ、五感を刺激する環境で子どもを育てないと将来が心配。

情操教育に力を入れるべき。教育のデジタル化が進む中だからこそ、人間本来の五感を子どもの頃から鍛えることが大事。

子どもが頭でっかちになっている。知っているが、やったことがない。体験を通じて学ぶことがますます大事になっている。

4 みんなが学び続ける社会

日本の教育は「将来何になりたいか」といったことを語らせるため、職業を1つに絞らせがち。いろいろな刺激を学生に与えていけばもっと夢が広がるはず。

学力重視の教育を頑張ると、地域の人口を減らすことになる。大学に行かずに高校を出て地元で仕事をしていく人を育てる道筋も大切。

いろんな
刺激で
夢を広げる

学生の大半が、何となく一般的な価値観で就職先を決めている。小さい時から、いろんな職業を知る機会、自分のキャリアや働き方を考える機会を与えるのが、学校や社会の役割だ。

生き方について若い人の視野が狭い。世の中にはいろんな仕事や稼ぎ方、生き方があるということに子どもの頃から触れられるようにする必要がある。

4 みんなが学び続ける社会

自分で何かをやってみようという機会を学校が与えていくことが重要だと思う。

自分の好きなこと、得意なことのでどのようにして社会に貢献できるかを子どもたちと一緒に考えることも大切。

好きなこと
得意なことを
伸ばせる環境

何かにチャレンジするときに、応援してくれる、受け入れてくれる空気感がまちにあることがとても大事。

今の若者は、社会は変えられないと思っている。学校教育の自由度を高めて、好きなこと、得意なことを伸ばせる環境、小さな意見やアイデアが生まれやすい環境をつくる必要がある。

4 みんなが学び続ける社会

子どもが成長する中で体験すべきことのミニマムは何なのか、それをどう確保するか、ということも考える必要がある。

特別支援という形で分けるのではなく、同じ環境で教育を受けながら、どの子ども次のステップを選んでいけるよう支援する教育が都市でも地方でも必要。

困難に向かって取り組む力など、学歴ではわからない力をつけることに地域や学校が親と一緒にあって取り組む必要がある。

いろんな
場所で
いろんな人に
出会う

画一的な学びではなく、いろんな場所で、いろんな人に出会い、いろんなことを知る機会があることが重要。

知識の伝達はよく練られた動画でやる方が効果的。学校でしかできない経験、集団でしかできない体験をするのが学校の役割になる。

親が地元の活動を一所懸命やる姿を子どもが見るのは、子どもの成長にも良いと思う。

4 みんなが学び続ける社会

大人も子どももみんなが共感し、
学び合って変化していく。ただ
住民になるのではなく、地域に
関わりながら暮らしていくこと
が、地域への愛着にもつながる。

学生・若者をもっと地域や社会
とつないでいかないといけない。

大人も子ども
も学び合って
変化していく

若者や子どもたちが普段関わる
ことのない人と世代の垣根を越
えてつながっていけるまちにし
たい。

グローバル化に対応する一方で、
日本独自の部分を保つことも重
要であり、そうした視点からい
ろいろな教育プログラムを地域、
学校、大学が連携して考え、実
施していくことが大事だ。

4 みんなが学び続ける社会

自分はどの地域に根差しているのか、どの地域に責任を持っているのかがインストールされていないとフリーライダーだらけになる。

家庭で「嘘をついてはいけない」と言っている親の割合が日本では減っていて10%程度。当たり前前のことが、もはや当たり前ではない。だから幼稚園や学校で教えないといけない。

コミュニティ
に対する
素地をつくる

コミュニティに対する素地がないと誰も地域に目を向けなくなる。

林業は実技で学ぶのが危険な内容も多いので、バーチャルで学ぶことは非常に有効。活用できる範囲は今後も広がる。

学校が持つ教育の機能を一部、地域に移し、地域の大人と子どもが交流しながら、ともに成長できるまちをつくりたい。

4 みんなが学び続ける社会

6・3・3制をやめて、成長に合わせて学ぶ場を選択できるような仕組みに改めるべき。

幼少期からいろんな形の教育を提供できる学校機関がいろんな場所にできたらいい。

不登校も一つの選択肢。学校に戻すことを考えるより、学校以外の学びの場を整えていくことが重要だ。どこにも行けていない子を減らすことが大切だ。

学ぶ場を
選択できる

不登校の話をよく聞くが、親が自分の価値観を押し付けるばかりで、子どもの心に寄り添えていないせいもあると思う。

フリースクールが重要になる。もっと多様な学校を選べる選択肢があればいい。

4 みんなが学び続ける社会

兵庫県に住めばこんな教育を受けられる、こんな人材が育つということを一つの魅力にして、しっかり発信していくべき。

学校教育の要諦は子どもたちの選択肢を広げること。脱「画一」が必要だ。

生活圏に求める価値で一番重視するのは、やはり子どもの教育だ。将来の進路の選択肢が狭まってしまうのは、大きなデメリットだ。

教育の選択肢
を広げる
脱画一

大学や短大での教育も変わり、複数の分野を専攻して幅広い知識を形成することや、卒業後直ちに就職するのではなく様々な経験をすることに充てるギャップイヤーを経る人が増える。

教育の選択肢を増やし、運動や芸術、農業、工学など、義務教育にも選択の自由があってもおかしくない。

小中学校でも、オンラインでいつでもどの単元でも勉強できるようにし、留年や飛び級を選択できるようにしてほしい。

4 みんなが学び続ける社会

大人の教育、生涯教育が広がる地域は魅力的である。

年齢に関わらず、好きなときに好きなテーマで学べるように教育のあり方を変えていくべきだ。

人生の中でインプットされたバイアスに気づくことも生涯学習の大きな意味の一つだ。

多世代が
自由に教育を
受ける

技術の進歩によって人から機械に仕事が置き換わっていくので、仕事が無くなりそうな人が別の仕事にスキルチェンジするための学び直しを整備していくことが大切だ。

若い世代だけではなく全世代が教育を受けられ、ITが強くなること。多世代が自由に教育を受け、世代間交流が活発になればいい。

学び続けられるというよりは、大人になっても学ぶのが当たり前、学び続けるのが当たり前の社会をめざすべきだろう。

4 みんなが学び続ける社会

一人二役、あるいはそれ以上できるように新しい能力を身につけたり、リタイア後も再度活躍できるように新たな能力を身につけたりといった、能力の再開発支援制度を作る必要がある。

今の日本には、日本人Aと日本人Bがいる。日本人Aは50代以上で、成人後にデジタル社会になった世代。日本人Bは30代より下で、スマホが体の一部になっている世代。今後は日本人Bが社会の主役になっていく。社会のヒエラルキーが変わる。

本気で生産性を上げないと非常に危険

サービス産業化＝低賃金層の増加とならないよう、サービス産業のキャリアパスを作り、学び直しの環境を整える必要がある。

日本では、民間企業の人的資本投資も少なく、官民合わせて人に投資していないので、遅れるのは当然。

日本の一人当たりGDPは世界の20位より下まで下がった。日本が相対的に貧しくなっているということ。本気で生産性を上げないと非常に危ない状況だ。

4 みんなが学び続ける社会

何歳でも何かを学んで得ることがある。

生涯にわたって学び続けることで、より良い充実した人生を過ごすことができる。

喫緊の課題は図書館を質量共に充実させること。

生涯に
わたって
学び続ける

生涯を通じて学べる機会を持つために、専門性を持った熟練者がリタイア後、学校を開くなど、義務教育以外の場での学習の循環を作る。

子どもから大人まで財力で差が出ない学習環境を。

行政が中途半端に生涯学習事業をやるよりも、受講料や通学費を補助するなどして大学の利用を促進すべき。

4 みんなが学び続ける社会

「みんなが先生、みんなが生徒、どこでも教室」をキャッチフレーズに、あふれる学びの場を実践している。

学びは完全に道具的なものではない。それ自体を目的とする学びもあってよい。

みんなが先生
みんなが生徒

地域の中にはいろいろな学びの場がある。テーマ型の学びの場をもっと増やす必要がある。

学校教育だけでなく、趣味のようなことでも学べる場がもっと増えれば、親と子どももより一層関係を深めることができる。

どんな挑戦を
する？

THE起業みたいなものばかりでなく、

もっとマイクロな起業を大切にして、

いろいろななりわいを持つ人が

集まり住む兵庫になってほしい。

5 わきあがる挑戦

「起業」が「就職」と同じぐらいの選択肢として普通にある社会をめざしたい。

起業がもっと身近だということが広がるといいのではないか。

兵庫県は、スモールビジネスがたくさんできる環境にある。スモールビジネスはやりたいことをやりたい方法でできる。自分プラス一人分の雇用ぐらいでビジネスができる。

起業をもっと
身近に

個人が地方で輝くには、仕事と何かを組み合わせで一人ひとりが価値を生み出していくことが必要。年齢に関わらず。みんなが輝く地域になってほしい。

DIYが地域の愛着に結びつく素晴らしい行為だと身をもって体感してきた。

起業家たちが人を雇用し、細い木が大きな幹になるような楽しく働ける環境をつくりたい。

5 わきあがる挑戦

百戦錬磨の人が伴走してくれるのであれば、迷っている人は一歩を踏み出すかもしれない。

強い側から弱い側へ、これぞどうぞと押し付けるのではなく、一緒に考え、一緒に決める「伴走」が大事。

資金や資金調達先を持ち、いかにコネクションを使って若い人と組んで、新たな事業展開をするかという、シニアの起業に向けた土壌づくりをしないといけない。

ポイントは
人との出会い
つながり

兵庫は有名な起業家を輩出しており、地元を愛している人もいる。そういった人とのつながりは県に期待する役割だ。

若い人が、好きな事業をどんどん起こしていくにしても、まず一人ではノウハウが足りない。ポイントの一番は、人との出会いやつながりである。

兵庫で創業しても、途中で出ていってしまう人もいる。兵庫にいたいなと思ってもらえる教育、環境づくりが大事だ。

5 わきあがる挑戦

兵庫は本当にダイバーシティ。
こんなになんでもできる場所
はない。

中山間地域は資源の宝庫。その
資源でビジネスを起こして課題
先進国の課題を解決できる。

農業×環境、農業×古民家など
のスマールビジネスが兵庫では
面白いのではないか。

兵庫は本当に
ダイバーシティ

最初の一步は、その人が踏み出
さないといけない。そのきっか
けが何であっても構わない。と
にかくまず自分から踏み出す、
出ていく、ということだろう。

豊かになりたいなら特区を各地
に立ち上げて、実験的なビジネ
スをたくさんやるべき。

5 わきあがる挑戦

ボランティア活動や地域のイベントなどへの参加を通して、つながりが広がり、考え方が変わる。そこから様々な課題解決へ発展するのではないか。

兵庫県がもう一度民間非営利セクターに目を向け、日本の「非営利活動の首都」と言われるようになってほしい。

市民活動だからこそ、何かに縛られることなく自分たちで進めていける。このことを発信していけば、地域づくりを主体的に考える人が増えるだろう。

寄付は
支え合いの
象徴

寄付は支え合いの一つの象徴だ。「日本一寄付の盛んなまち」を5年ぐらいかけてめざさないか。

地域に関わりのある人がどんどん参加して、地域づくりや事業に投資してもらえるようなコンソーシアムができたらいい。

大事なことは一人ひとりの市民参加であり、個人の寄付が盛んになること。

寄付が当たり前の支え合いの文化を作らないといけない。支え合いにはいろいろな形があって、時間は割けないけれども、お金は出せるということもある。

5 わきあがる挑戦

将来には不安もリスクも多いが、それを解消するためにもチャレンジングな人材が活躍できる環境をつくっていく必要がある。

再挑戦を許してくれる社会、失敗してもそれがペナルティにならない社会、再チャレンジするときに資金面などで支えてくれる社会の姿が見えるようになるとよい。

リスク、失敗、違いを恐れない、そして非難しないという方向性を明言するビジョンを望む。

リスクを
取りやすい
社会へ

一人ひとりが小さく始めていくことを推奨することと併せて、リスクを取りやすい環境を作ることが大切だ。

日本社会はやり直すときのハードルが高い。やり直したい人をサポートする仕組みの充実が必要である。

日本は起業のリスクが高すぎる。失敗しても大丈夫と安心できる環境の整備に力を入れる必要がある。

5 わきあがる挑戦

学びやチャレンジする場の確保をビジョンとして打ち出すと、若い世代には魅力的に映るのではないか。

若者が働きやすい場所や、若者自らが起業しやすい環境をつくる。若者がチャレンジして失敗しても、敗者復活できる地域でありたい。

若者は我々が余計なことをしなくても自走できるポテンシャルを持っている。だが、社会の圧力で、自分で枠を作ってしまうので、それをいかに外して、どんどんやっていいんだよと言っていけるかがポイントだ。

自分の枠を
はずして
挑戦する

1回起業して終わり、就職して退職して終わりではなく、いかに起業を繰り返していくか、シニアになってもアントレプレナーのような生き方を続けることができるかが大切。

起業するなど、主体性を発揮できる人もいる一方で、格差がより大きくなってしまっているのではと心配している。

自分で個性や創造性が発揮できない方がいる。そういった方が、落ちこぼれないようにしないとイケない。

5 わきあがる挑戦

お金は会社からもらうものではなく、自分で作り出すものだと知ることが大切。そうしたマインドを育む教育をすべき。

子どもたちが地域社会の中から、好奇心を伸ばしていくような取組が広がればいい。

お金 = 価値は
作り出す
ものだ

学校などの箱物がなくても、何をやりたいかを応援できる体制があればいい。

小さい時から地元の課題を認識しつつ、経験も地元でして、課題を解決したいと思ったらビジネスを作れる、将来的に戻ってくることもできる、という教育は大変重要ではないか。

実際に商売をやってみるとか、ものづくりをしてみるとか、実際にお金をもらうところまですることが、本当に役に立つ教育になる。

5 わきあがる挑戦

生き生きワクワクだけではなく
静かに生きたい、何もせずに生
活したいという人の望みも叶う
地域でもあってほしい。

人が減っていて、集落の活性化
に労力をかけて取り組むところ
まで至らないが、人が減っても
ここでできる限り生活したいと
いう人が多い。

静かに生きた
い人の望みも
叶う地域に

スポーツであれ、他の学びであ
れ、新しいことにいくつになっ
てもチャレンジしていくことが
当たり前の社会になればと思う。

自分のしたいことを自分の好き
なタイミングでいつでも始める
環境が整っている社会になれば
良い。

結婚までに自分のやりたいこと
をしようという考えから女性
の方がチャレンジする人が多い。
男性の方が保守的である。

暮らしの中での 文化とは？

広い意味での文化が暮らしの中核にあり、

一人ひとりがそのまちに生きる価値を

見出しているということが、

これから重要になる。

6 わきたつ文化

毎日の暮らしの中にもっと面白いこと、アート、楽しいことを埋め込む。それが特別なことではなく、誰もがやっているような地域をつくりたい。

自分が身に着けるものや身近な空間の美化など、暮らしの中で表現することで、人とのつながりを感じたり、ある場所を大事に思ったりすることができる。

アートは無駄ではない。生きる力になるものだ。

アートは
生きる力に
なる

なくても生きていけるものが人生を豊かにしてくれる。

文化のような一見無駄に見えるものが実は社会の活力源になっているという視点が大切だ。

芸術は心を豊かにするだけでなく、世界の共通言語である。

6 わきたつ文化

生活文化が均一化している。
もっと多様な文化が育ってほしい。

文化を議論するときには大事な
のは、スケボー、スプレーペイン
ティングなど若い人の文化を周
縁化しないこと。いろいろな文化
を活かしてつながりをどう作る
かという視点で考えていく必要
がある。

ダンス、スケートボード、BMX
などスポーツと文化の融合領域
が今元気だ。

芸術やスポーツ
が日常に
根付く

伝統文化をはじめ、芸術やス
ポーツが何気ない日常に根付い
ている地域をつくりたい。

観光的でなく、素朴な原風景を
残しながら住民や移住者の暮ら
しにアートが溶け込んで潤いを
与えている地域をめざしたい。

芸術、音楽、習い事などで自分
の幅が広がり、人生を変えてく
れたと思っている。そういう選
択肢が田舎にもあれば、都会よ
りも素敵な住む場所になる。

6 わきたつ文化

芸術文化はもっと身近なものだと思っている。誰かと対話するだけでも、演劇の一手法だし、そのことで人の暮らしももっと豊かになる。

文化は協働の有効なツールでもある。コロナ禍でも、人の心を支える上で、音楽や演劇や本など文化の力が大きかった。

心を一つに
合わせられる
のが文化

地域の人が同じ方向を向いて、こんな地域をつくってほしいと心を一つに合わせられるのが文化である。文化は地域をみんなで作っていくために大きな役割を果たす。

芸術を通じて地域とかがわりたい。言語が要らないところでどうつながれるか。体験型で何ができるかを試していきたい。

共同体を維持する一つ的手段として、伝統行事や、今の音楽、映画などの文化を生かしていく。

6 わきたつ文化

いい文化を新たに作るだけではなく、過去の歴史文化を振り返って、だからこうなっているという理解をするような、振り返りが重要だ。

伝統は守りましょうという思いは守っても、形は変化していて、その変化を認められることがこの産地の特徴。

新しい文化の創造も素晴らしいが、これまでの文化を大事にして発展させる視点が入ったビジョンであってほしい。

新しい文化を
自ら耕して
つくる

形骸化したものを正確に継承していくことには意味がない。受け継いだものをどう表現するかは、次の世代に委ねられている。

これからの時代に必要な文化を創るときに、昔の文化が参考になるならそれを使えばよいが、そうでないなら、新しい文化を自ら耕してつくるまで。文化とはそういうものであるはずだ。

いったん失われたものは元には戻らない。有形無形の遺産の保存、継承に取り組んでほしい。

6 わきたつ文化

初等教育で思考力、判断力、表現力を育成するために、豊岡が進めている演劇教育を県全体で導入してはどうか。

フランスでは、小学生や中学生が美術館や劇場に定期的に行く機会がある。日本でも遠足で美術館に行くが、そんなに行く機会はない。

地域の人たちが、その土地の歴史や文化に触れる機会を積極的に増やしていかないといけない。

小さい頃から
文化に触れる

日本の美術館がつまらない。会話ができ、座り込んで模写できる場に変えられるかどうか。

小さい頃から音楽や、楽器と触れ合うことも大切。音楽の好みなどから個性を見つけていけるのではないか。

子どもから高齢者まで気軽に音楽を楽しめる環境をつくり、豊かな心が育まれ、活気にあふれる地域をつくりたい。

なにを
大事にする？

十人十色、

人それぞれに生き方、考え方が異なるという、

ごく当たり前のことを大事にする、

個を尊重する社会の実現こそが重要。

7 みんなが生きやすい地域

自分の家族の一人ひとりの違いを認め、受け入れる。それができてはじめて、周りの人の違いも認めて受け入れられる。

多様性が認められるなら誰もが窮屈な思いをすることなく伸び伸びと様々な人と交流ができる。さらに個性が集まり、斬新なアイデアが出れば地域の活性化にも繋がる。

国内で多様性に触れ、コンフリクトを解決していくことで、多様性を受け入れる力がつく。

いろいろな
価値観に
触れること

差別的な発言をした人を叩くだけでは問題は解決しない。なぜ多様性が重要なのか、なぜ人種差別はいけないのかといったことを大人も子どももきちんと学ぶ機会をつくる必要がある。

多様な国の人々、様々な世代の人々と対話をしていくことが重要だ。どれだけいろいろな価値観に触れられるかが鍵だ。

フェアな社会の実現をビジョンで打ち出してほしい。

7 みんなが生きやすい地域

大事なのは共感行動ができることで、それがエンパシーである。心の中で何を思っている、そういう行動ができればよい。

いろんな差を一つひとつ埋めていく、手をつないでサポートする、こういう取組をひたすらやっていくしかない。

30年後の2050年にも残る大事な価値は、人間の温かみ。一人になったらどうなるかわからない。でも誰かがいるなら安心。

大事なのは
共感行動が
できること

実際に会って交わってみることで、多様性を受け入れる力が養われると思う。自分もOK、あなたもOKという広やかな心が明るい社会をつくっていく。

これからは性別や住む場所等で様々な選択肢が出てくると思うが、どれを選んでもフラットに話せる社会になればいい。

いろんな働き方を生み出し、いろんな場所へ行ける、いろんな生き方ができる、いろんな人と交流ができるようにしないとイケない。

7 みんなが生きやすい地域

自分の権利だけ主張して、相手のことは知らない、私は私、ではなく、他者をしっかり受容するような気持ちを醸成するところを大事にしてほしい。

やりたいことはできるが、それで他の人に迷惑をかけてはいけない、そのためには、心の余裕があって、人を思いやる気持ちがないと、そうすることができない。

みんなが好きなように選んで、それを誰も咎めることがない社会になればいい。

他者を
しっかり
受容する
気持ちを醸成

国籍、性別、年齢といった具体的な事項だけでなく、日々変化する各個人の考え方、生き方へのこだわりといった抽象的なものを尊重する時代になってきている。

マイノリティと呼ばれる人々の考え方が当たり前になってほしい。そのためには、様々な人と出会い、意見を交わせる環境が必要。

7 みんなが生きやすい地域

少数派を排除するのではなく、認め合うことで全ての人肯定され、豊かな暮らしができるようになる。

日本は、マイノリティの人たちを目に見えないようにしている。まちが受け入れていない。家庭に閉じ込めて、ケアする人もいなくなってしまう。

いろんな人がいて当たり前の社会が共生社会。排除してきれいにする社会を共生社会とは言わない。

いろんな人が
いて当たり前
が共生社会

様々な文化や宗教、背景を持った人が集まって共に生活し、誰もが差別されずに、自由に生き、夢を叶えられる社会であってほしい。

人は、みんな違ってみんないいという考え方が浸透することで個性を認め合える。

今現実に関心なく生きられないことに苦痛を感じている。

7 みんなが生きやすい地域

あらゆる面においてルールが優先されすぎているような気がする。古いしきたりはなくすべき。

兵庫、神戸ともに開放的と言われながら、実際は保守的で他者を許容しない雰囲気を持っている。

村社会から変わっておらず、県外からの移住者がコミュニティに入って行き難い地域がまだある。

価値観や認識
の押しつけを
なくす

固定概念で役割が決められている社会の仕組みを変えていくべき。

自分の価値観や認識の押し付けをなくし、理解を深めることが必要。理解ができなくても受け止めることはできる。

7 みんなが生きやすい地域

外国人を受け入れる環境がまだまだ脆弱。

多文化に日常的に触れている人ほど、偏った考えを持たなくなるものだ。そのためにも外国企業の誘致や留学生を増やす施策が重要だ。

多文化に
日常的に
触れる

移民を受け入れない限り、人口減少は防げない。

海外との賃金差が少なくなってきたので、外国人労働者の処遇を良くしないと、誰も来てくれなくなる。現行制度の改善を望む。

外国人が増えているが、まったく交流がない。

7 みんなが生きやすい地域

70歳を超えてもシルバー人材センターなどを使って目一杯働こうとする人が増えている。退職して悠々自適なのは一部の上層の雇用者だけだ。

時間を持て余しているシニアが多い。

後期高齢者医療保険料や介護保険料が高いのに、働き口がなかなか見つからない。

シニアの活躍

定年制をなくして働けるだけ働けるようにすべき。

年金があてにならないので、長く働きたい。

定年後に新たな社会生活を始める人がいる一方で、埋もれていく人もいる。

シニアに活躍してほしいが、受け身の人が多い。

7 みんなが生きやすい地域

高齢でも働ける場所が必要。また、自分の趣味を見つけて充実させたり、仕事で得た知識や自分の経験を活かして社会への奉仕活動をしたり、後輩を育てたりすることが大事。

自分の経験を
活かして
次代につなぐ

高齢者は働いて自立するべきだ。このままでは借金で国が破綻する。

自分は健康面でも精神面でもまだまだ頑張れる。世の中の役に立ちたいシニアはたくさんいる。

若い人の負担を少なくするためにも高齢者が働いて納税する必要がある。

7 みんなが生きやすい地域

多文化だけではなくて障害者の方も含めていろいろな人たちと一緒にどう暮らしていくかというのは一つの課題だ。

年齢、性別、障害の有無を問うばかりでなく、本当にすべての県民が力を発揮できる状態を作ることが必要だ。

特別支援教育＝特別支援学校ではない。健常者と障害者を分ける発想は間違っている。両者が一緒に学ぶ場を作るのが本当のインクルーシブ教育だ。

すべての県民
が力を発揮
できる社会へ

子どもに障害があるとわかった瞬間に、プラス要素は何もない、未来は終わった、と思う人が多い。そう思わないでよくなる社会にしたい。

身体障害者は実は65歳未満では減っていて、増えているのは精神障害者。いわゆる「見えない障害」の人たちにとってのユニバーサルの視点が今後一層重要になる。

7 みんなが生きやすい地域

「産福連携」を進めてほしい。
すべての産業とすべての福祉の
連携だ。そうすれば、もっと社
会が活性化し、雇用も内需も拡
大するはず。

産業界と福祉が手を組み、障害
を持った人が働く形を作ること
によって新しい価値を生み出せ
るし、正規雇用や1日8時間と
いった従来の働き方とは違う世
界を提示できるようなも思う。

誰にとっても
不自由のない
社会

大事なのは、できない人が、い
かにできるようになるかという
こと。ICT一辺倒ではなく、ハ
イブリッドに使いこなすことが
重要。

誰にとっても不自由のない社会
が実現できれば、障害という概
念が消えていく。このことが究
極の姿ではないか。

障害者が、障害を持っているこ
とを理由にできることが狭まる
ことのない環境が整っているの
が理想。

7 みんなが生きやすい地域

今のままではこの国で娘を育てられない。それぐらい女性が一人の人間として尊重されない。

旧態依然としたルール=因習を変えないと若い女性は帰ってこない。女性が生き生きと働ける環境という意味では、まず賃金を上げることだ。

法事があると男は酒を飲んで騒いでいるが、女は炊事場で料理してお酒を出す。そんな地域に誰が帰りたと思うか。女性が生き生きと暮らせる地域を作らないと人口減少は止まらない。

女性が
生き生きと
暮らせる
地域へ

男女共同参画が叫ばれて久しいが、そうなるためには本当に思い切った改革が必要。

女性の管理職を増やしても何の解決にもならない。夫婦別姓が普通の社会になってほしい。

性差別が根強く残っており、生きづらさを感じる。男女で役割が違うという意識に囚われている男性が多い。

ジェンダー平等でなければ兵庫県は人口は減るばかり。

7 みんなが生きやすい地域

みんなが安心していられる環境に性の多様性は必須の要素だ。

開放性の徹底で一番大事なものはLGBTの話だ。ここが進むかどうかで全然未来が違う。当事者の話を一度聞いてみてほしい。

同性でも結婚できるなど、性別に関係なく生きやすい社会は、「誰も取り残さない社会」に必須の要素だ。

性別に
関係なく
生きやすい
社会へ

女性、女性と言い立てること自体が男性視点。性別に関わらず得意なことがきちんと評価される社会に変えることが大切。

言えない裏には性的マイノリティに対する偏見や差別への恐れがある。人知れず苦しい想いをしている人がどれほどたくさんいるか。

今の日本は性的マイノリティであることが、生きづらさや貧困と結びついてしまう社会だ。

7 みんなが生きやすい地域

100%男かと聞かれたら、実は90%ぐらいかなといったことは誰にでもあることだ。性のあり方をグラデーションで捉える見方が求められている。

自分は男と思うか、女と思うか、恋愛対象として異性が好きか、同性が好きか、あるいはそのどちらでもないといったことは、すべての人に関わることで、SOGIEは誰もが持っている性の要素だ。性の問題は、みんなの問題である。

性のあり方を
グラデーション
で捉える

性の問題でも教育が肝だ。いろんな人がいていい、違いがあっていいという教育の中で、性の多様性についても伝えるようにすべきだ。

性に関する偏見を解消するために、学校の授業で積極的に学ぶ機会を与えたり、地域で性的マイノリティへの理解を深めるイベントを開催したり、行政でも工夫をしてほしい。

7 みんなが生きやすい地域

助けてと声を上げてもいいと思える社会に変える必要がある。

社会では個人化が進んでいるのに、国も自治体も家族を好む政策バイアスがきつい。

SDGsの1日1.25ドル以下の貧困は我々の課題ではないが、シングルマザー、低所得者層などの相対的貧困なら我々の課題だ。

困った時に
助け合える
社会へ

未婚率の高さは所得水準の低さや非正規雇用と関係している。格差のような触れにくい問題にどう対処していくかが大きな課題だ。

社会的弱者が一方的に支援を受けるのではなく、困った時は誰もがお互いに手を差し伸べられ、助け合える社会を構築しなければならない。

人口が減っているのは世の中が不安だから。貧富の差が激しい。弱者の立場から政治をしてほしい。

7 みんなが生きやすい地域

ユニバーサル社会とは、すべての人が持てる力を発揮できる社会のことだ。

ユニバーサルデザインの理念と現実がかけ離れている。

高齢者、障害者が楽に出かけられる地域をまず作るべき。

制度が届かない人、情報が届かない人、行動に移せない人が山ほどいる。

すべての人が
持てる力を
発揮

高齢者世代や障害をもつ方のみならず、誰もがロボットなどのサポート器具を当たり前にする時代をめざしたい。

社会の情報化に取り残される人はこれからもいるだろう。すべての人が過ごしやすい世の中にするためには、手間はかかるが、アナログかデジタルかを選択できる未来になればよい。

3Dプリンタで服が作れるようになり、性別や年齢にとらわれず、ファッションを楽しむ価値観が浸透してほしい。

7 みんなが生きやすい地域

高齢者などデジタル機器になじみの薄い世代や、使うのが苦手という人のためにも、地域コミュニティなどに頼って互いに助け合うようにする必要がある。

高齢者がデジタル機器を使えないというのは思い込みにすぎなくて、そこにこそ自治体が新しいサービスを作る余地がある。

高齢者など情報通信に不慣れな人でも、使わないとやっていけない社会になる。そのために誰でも使えるツールを開発する必要がある。

デジタルディバイドない社会

あらゆる県民がデジタルデバイスなく、情報にアクセスできて、いろんな文化に触れたいときに触れられる、学びたいものも学べる、そういう社会が望ましい。

リアルな機会の提供が大事だとは思いますが、生活に必要な手続きなどはバーチャルで誰もが在宅で利用できるようなになればいい。

子育てに
大切なことは？

子育ては一人ではできない。

人との関わりが絶対必要。

そこは30年経っても変わらない。

豊かな人間関係が子育てには必要。

8 安心して子育てできる社会

家族が孤立しているのは確かだが、むしろ家族は孤立しないといけない、自分たちで全部やらないといけないと思いついでいる人が多いのも事実。

少子化を抑制したいのなら、子どもと若い家族への給付が少ない現状を変える必要がある。

教育、子育てへの支出を抜本的に拡充し、家庭の経済力が子どもの育ちに影響する構造を変えない限り、格差の連鎖は続く。

いろいろ支援はあるが、線がつながっていないので結局どれだけ自分で情報を集められるか次第になっている。

教育、子育ての優先順位を高める

人口対策の施策の効果が見えない。何となく効くのではないかという感じの施策が多いが、本当に意味のある施策かをよく考えることが大事だ。

日本は子育てや教育に振り向けられる税金が少ない国だ。そのベースには、それは家族で賄うものという国民の認識がある。

子育てが外部のサービスを使う世界になっていく中で、その負担をどう下げるかを社会全体で考えないといけない。

8 安心して子育てできる社会

「結婚したいのにできない」
「子どもを産みたいのに産めない」などのハードルを取り除くことが行政の大事な役目。

子育ての負担をすべて母親が背負っている。楽しみたいとしても楽しめない。

親の責任が重すぎて、子育てを楽しむ余裕がない。子育て世代をおおらかな目で見守ってくれる社会を希望する。

子育ては
楽しいという
社会の空気をつくる

いろいろあるけど、やっぱり子育ては楽しいという社会の空気をつくる必要がある。そのためには、大人の態度が変わらないといけない。

親がストレスなく生きられる環境が子どもにもよい影響をもたらす。「余裕」が大事。

若い女性を地域に留めたいと言うが、その背後には「地域に残って子どもを産んでもらわないと困る」という考えがある。その発想がある限り、若い女性は都会に逃げていく。

8 安心して子育てできる社会

出生対策で経済的な措置をやっても出生増に結び付かない。むしろ近隣市に人が流れている。

子育て施策は消耗戦だが、やらざるを得ない状況。子どもを増やす対策は、国が仕切ってくれた方が自治体間の差が出なくてよい。

社会で子育てしないといけない。子育てのハードルが下がらないと子どもは増えない。家族を経済面だけでなく、気持ちの面でどう支えていくかが大事。

家族を経済面
だけでなく
気持ちの面
でも支える

少子化が問題とされながら状況は変わっていない。子どもは宝。子育てしにくい社会は滅ぶしかない。

家庭に対して教育や生活に関わる経済的支援が十分に行われ、多子を産み育てることに県民が躊躇しなくなっている社会になってほしい。

子育て支援を充実させ、地域全体で子どもを育てていくシステムの構築を進めるべきだ。

8 安心して子育てできる社会

いまだに男性は仕事、女性は家庭という固定観念が強い。特に男性の育児への参加を強めることが大切だ。

安心して子どもを産み育てながら自分らしく人生も仕事も楽しめる社会が理想。

夫の親を頼りたがらない女性が子育てしながら働き続けられる地域にしていけないといけない。

自分らしく
人生も仕事も
楽しめる社会

子どもを安心して育てられ、お母さんが元気で、女性が輝いている地域が、健康で元気な地域だと思う。

保育園に子どもを入れてまで働かなければちょっと余裕のある生活が送れない世の中だ。

自分一人で抱え込むことなく、必要に応じてサポートを受けられる子育てのしやすい社会、それによって子どもたちが伸び伸び輝くことのできる社会になっていけばいい。

8 安心して子育てできる社会

在宅勤務できる仕事は在宅勤務にシフト。これにより子どもと過ごす時間を作りやすくなる。

妊婦や子育て世代を大事にしてくれる職場環境を整えてほしい。

育休よりも時短勤務を普及させて、継続して子どもと関わられるような環境整備をしてほしい。

働く大人が
子育てを優先
することが
当たり前

多様な働き方が広がって、安心の子育てを牽引する地域になってほしい。

男女関係なく、希望すれば必ず育休が取得できる環境、様々な働き方が認められる環境になってほしい。

働く大人が子育てを優先するのを当たり前と思える社会にならないといけない。

8 安心して子育てできる社会

子どもたちが走り回る姿は地域を元気にしてくれる。でも、子育てには相当な労力がかかる。だからこそ、じいじやばあば、地域の支えが必要。

お母さんの責任をちょっと軽くしてくれる場がもっとあったらよいのに。

何かあっても信頼関係の中で対応できるような関係が必要で、少人数で良いので、そういうつながりを持つことがまず大事。

お母さんの
責任を軽く
してくれる
場があれば

在宅で子育てしているお母さんにも自分の時間が絶対必要。後ろめたさを感じて言い出さない人もいるが、リフレッシュは必要だ。

地域の企業や団体なども関わりながら、巻き込みながら子育てをしていくという視点が大事。

子育て世帯だけをターゲットにしても子育ての課題は解決しない。親になる前の世代やシニア世代の理解を深める取組も大切だ。

8 安心して子育てできる社会

登下校時間に大人が声掛けをするなど、地域ぐるみで子どもの見守りを進めたい。

親たちはポジティブな意味で早く白旗を挙げた方がいい。どうせ自分たちだけで子育てをやりきれない。もっと周りに頼っていい。

いつも遠慮しなきゃいけない社会ではなく、地域の人々の温かい言葉や支えに「ありがとう」と言って頼りながら子育てできる社会でありたい。

地域ぐるみで
子どもを
見守る

人類学や生物学の観点からすると、共同保育的な家族の在り方こそ普遍的。近代の核家族的なあり方の方に無理があったということに世の中が気づき始めた。

地域の人同士で「夕食のお裾分け」「保育園の送迎」「公園に連れて行く」など、細かい内容ごとに支援を申し出ることができるサービスがあれば良い。

8 安心して子育てできる社会

身近に遊び場があっても整備がされていなかったり、古かったりで、使いにくい。

子どもの目線で地域の環境を見る必要がある。

次世代の青少年のために遊び場を確保する必要がある。

歩いて5分で海に入れるのに、学校も親も海に入ってはいけないと言うので、海に入ったことのない子どもがいる。これではまずいと自然体験活動を始めた。

子どもたちを
安全・安心に
遊ばせたい

子どもが安心して外遊びができる環境づくりが大事。

子どもが周りを気にすることなく外で遊ぶことができ、子どもが外で遊んでいても親が不安に思うことのない社会が望ましい。

小さな子どもが安心して外で遊べ、お年寄りも憩いの場として利用でき、小中学生も伸び伸びと遊べる環境をつくりたい。

8 安心して子育てできる社会

育休中にママが楽しめる場所が行政サービスではあまりなかった。

子どもが通っている園や学校とは違う場で、お母さん同士がフラットに話せる場が求められている。

地域の中に
子育ての
交流拠点が
ある

子育てで悩む親のために、気軽に相談できる役場以外の場所づくりが必要だ。

母親同士の交流の中から、自分ももう一人育ててみようと思う人も多い。地域の中に子育て系の交流拠点があることは大きな意味がある。

8 安心して子育てできる社会

多様な愛や家族の形が当たり前
に認められる社会になってほし
い。その代表県として兵庫県が
日本全国のみならず世界にも発
信できるようになってほしい。

婚外子や養子縁組など様々な形
で子どもを持てる環境にしてい
くために、偏見や差別をなくす
活動を進める必要がある。

一人親、貧困、不登校、発達障
害の陰に隠れているつらい親子
がいっぱいいる。支援を必要と
している子は見えている以上に
多い。

どんな家族の
形でも
排除されない

いろんな形の家族があってよい。
どんな家族の形であっても排除
されないということが大事だ。

核家族を理想とする戦後の家族
政策が今日に至るまでそのまま
行われており、実際の若者の多
様なライフスタイルとうまくか
み合っていない。

出生率の上昇が大目標なら、や
るべきことははっきりしている。
結婚の多様化を進め、アファ
ーマティブアクションも入れて、
女性の意見が様々なところで反
映される社会制度を作ることだ。

どんな社会

を望む？

泣いている子どもがいたら声を掛ける、

困っているお年寄りがいたら

手を差し伸べるような、

温かい社会になればいい。

9 安心して長生きできる社会

今後は健康であることが価値になる。「健康であれば保険料が安くなる」など、健康・医療情報を利用したサービスが普及し、医療費削減にもつながるエコシステムが形成される。

健康で病気になりにくい身体をつくる、運動してできるだけ医療のお世話にならないようにする、医療費をなるべく急カーブで上げないようにするという事前の策が大事だ。

健康である
ことが
価値になる

就労意欲のある高齢者、学習意欲のある高齢者が現役世代と変わらぬ環境を享受し、障壁なく活躍することのできる社会になってほしい。

元気な高齢者が趣味や娯楽をできる場を増やすだけでなく、元気な高齢者が介護が必要な高齢者を援助したり、話をしたりする場を作り、若い世代の負担を減らすことも大切。

寿命が長くなっても寝たきりでは意味がない。

9 安心して長生きできる社会

地域医療連携ネットワークシステムを普及させ、迅速な患者情報の提供など救急医療現場で大いに活用していく必要がある。

最期まで自宅で過ごすのが当たり前になり、急変時は自動で主治医や救急に情報が行き、迅速に対応できる仕組みをつくってほしい。

県の南部と北部で医療連携することで、災害が起きた際にどちらかが医療体制を整備している状況を作り出せる。大地震発生時に有効な役割を果たし、他の地域のロールモデルになる。

先端医療技術
分野の強みを
活かす

医療技術による健康寿命の維持と、加齢により失われた心身機能を補う科学・工業技術の活用により1人でも多くの高齢者が社会を支えることで、持続可能な日本社会を実現できる。

先端医療技術分野の強みを活かし予防医療にさらに力を入れ、高齢者が知識や経験を若い世代に伝えながら仕事や活動を続けられる社会を実現できれば兵庫はますます魅力的になる。

9 安心して長生きできる社会

高齢者を介護する家族が自宅や職場から対応することができて、介護を理由とした同居や離職、休職などがなくなっている未来を望む。

介護や病院にかかる費用、娯楽や旅行にかかる費用の支援、インターネットが苦手な人への無料授業など様々なサポートがあり、老後の自分の時間をより楽しんでいる未来になれば。

安心して
老いて死ねる
環境を望む

一人暮らしでもサポートを十分に受けられ、多額の費用を負担せずに済み、安心して老いて死ねる環境を望む。

3人の親を介護したが、病院や施設の渡り歩きが大変だった。

今や長寿が周囲から喜ばれない社会だ。ケアする介護者も尊ばれていない。

9 安心して長生きできる社会

一人ひとりが好きな場所で、自立して健康に生きることができる社会が理想。最期を迎える時には、自分の好きな場所で死ぬことができればいい。

尊厳死の選択が自由になってほしい。

寿命が伸びるのはよいが、必要以上に生かされるのも大変だ。

一人ひとりが
自分の最期を
きちんと
考える

死をタブー視せず、一人ひとりが自分の最期をきちんと考えるよう啓蒙することが大事。

去年母を看取ったが、私には最期を看取ってくれる子どもがない。

9 安心して長生きできる社会

今住んでいる地域は、大きな病院からは遠いが、調子が悪い時に隣近所の人気が遣ってくれるという安心感がある。

家族だけで抱え込むのではなく、地域全体で支えるというメッセージが伝わるとよいと思う。

家族や地域から孤立して社会的に排除された人が増えることなく、周りには家族のようにサポートしてくれる人がいる社会になってほしい。

隣近所の人気が
遣ってくれる
安心感

地域住民全体を見守るネットワークがあった方が、安心して暮らせることにつながると思う。

人とつながる機会や新しい趣味に出会える環境があり、誰もが老後を楽しむことができる。

病気で苦しんでいる人や精神的に疲れている人の心の安定につながる場所がほしい。

支え合いは昭和の発想。行政は支え合いを過大に評価しがち。個人の自立が基本であるべき。

9 安心して長生きできる社会

ケアマネジャーをしており、最期まで安心して暮らせることの難しさを毎日痛感している。

障害のある人が、両親が亡くなってからも、安心して暮らしていけるようにしてほしい。

若い世代の利便性を求めるだけでなく、高齢者も安心して暮らせる社会になるようにしていくべきだ。

どこにいても
手厚い支援が
受けられる

年寄りが安らげる社会こそ最高の社会。誰でも必ずその時期を迎えるから。

子どもを地域に預けたら勝手に育てくれる、かつ高齢者も子どもと関わることで生き生きできるような姿があったらいい。

介護、医療、子育て、災害など全般として、どこにいても手厚い支援が受けられる地域になればいい。

9 安心して長生きできる社会

住宅が全部商品になると、商品に住めない人がいっぱい出て社会が不安定になる。

独身なので、今後の人生に不安を覚える。

年金に頼れない。貯金がないと暮らせない。

農村部で歳を重ねるのは心配。公共交通機関が充実していない地域はどうなるのか。

このまま歳を重ねるのは
心配

人を集めて住まわすことが必要になる。コンパクトシティ化を進める条例を制定すべき。

住む地域で医療費の所得制限が違うのはおかしい。

医療費、介護費用などより、もっと他に有効な税金の使い道があるのではないか。

日本は再び出自が問われる社会になりつつある。

どんな経済を
めざす？

これからの主流は、

効率化・標準化されていないローカル経済。

地元で仕事が回っていく形をつくり、

顔の見える経済をつくりたい。

10 循環する地域経済

働くことの中に人間の幸せがある。だからこそ雇用の創出、経済的な自立が重要。経済が動かないと地域は主体的に動けない。

どんなに自然が豊かで、ゆったりとした田舎の良さがあっても、産業がしっかりと特徴を持って自立している地域でなければ暮らせない。

産業団地の整備を進めているが、かつてほどの雇用が生まれない。若い女性も好まないだろう。女性が魅力を感じる職場を作らないといけない。

経済が
動かないと
地域は主体的
に動けない

最近は工場ができるといっても無人化した工場が多いので、必ずしも雇用につながらない。事務系がないと女性の就職にもつながらない。

阪神全体でインバウンドを呼び込む、新しいサービスを開発するなど、地域でまとまって付加価値の高いものを生み出していないといけない。

産業振興でどんな施策を打てばよいのか正直困っている。地場産業同士の連携、民間と行政の連携など、いろんな連携策を戦略に取り入れていきたい。

ものづくりは地域に根差した雇用を生むため、製造業が発展する仕組みづくりが必要。

既存の製造業のみに頼っているのは県の産業の発展は大きく期待できない。

行政が形を作って民間にさせる従来型のやり方は限界。課題を示し、民間に取り組んでもらって、それを支援することが行政の役割になっていくだろう。

非接触型の
サービス産業
を伸ばす

今後、行政だけではできないことがますます増えるはず。住民、企業、団体などとチームを組んで取り組む形をもっと広げていく必要がある。

これから伸びる非接触型のサービス業にとって望ましい環境は何か。工場誘致という伝統的な政策の一方で、非接触型のサービス産業を伸ばす観点からどのような産業政策が必要かを考えることが重要だ。

大学の研究者や専門機関を気軽に活用して、多くの企業が最初の一步を踏み出している。更に行政の支援も受けながら、様々な企業がスモールスケールのDXを進めている。そうした未来になってほしい。

企業経営の刷新で一番障害となるのは経営者と言われる。長年の成功パターンを捨てられず、勉強もしない人が多い。

様々な企業が
スモール
スケールの
DXを

新しいライフスタイルが生まれ、そこでイノベーションが起こる。技術革新以上に、生活のイノベーションに伸びしろがある。

今後のものづくりでは、組み立てよりも、素材の発見や新しいモノを生み出す生産設備を持つことが大事。

ただ単に精密にものをつくるのではなく、機能美を加えたものづくりができる会社を兵庫県で実現したい。

ICTを駆使してものづくりを革
新的な産業に発展させたい。

地場産業が従来関わりのない業
種と連携することにより、新商
品の開発や産地ブランドの確立
に発展する。

伝統産業に
新たな要素を
取り入れる

職人が進化した科学技術を伝統
工芸に取り入れることで、伝統
工芸品が新たなステージへ昇華
していく。

伝統産業に現代の要素を取り入
れて革新すべき。

日本酒という地域に根付いた歴
史あるものに、スイーツという
新しい要素を加えただけで、資
金を外部からインターネットで
集めて、付加価値が生み出され
ている。

10 循環する地域経済

地域に小さな仕事を作っていくことが大事。地域にある仕事は、社会的に弱い立場の人たちの参加につながり、従来型の地縁組織の強化にもつながる。

ベンチャーだけでなく、もっと小さな起業を大切にすべき。

中堅中小の裾野を広げて、そこと先端を走る大手とをつないで、オール兵庫でシナジーを出す仕掛け作りが必要。

ローカル経済
を強くする

大企業中心ではなく、10~20人の中小企業を主流にしていくべき。麦もホップも自分たちで作ってクラフトビールを作る。地元の工務店に県産材を使って家を建ててもらおう。そんな動きを一つひとつ応援してローカル経済を強くしていくべきだ。

5000人の大企業1社より、10人の会社が500社集まって5000人分の仕事を生むのがめざす姿。

効率ファーストではなく、ローカルファーストの経済に切り替えるべきだ。例えば東京ではなく、地元のクリエイターに発注する。そうしないとクリエイティブ産業は流出するばかり。

大企業中心ではない新しい経済が兵庫で広がれば、それに共感する人が集まって、もっとワクワクする地域経済の形が作れると思う。

若者がやりたがる、企画の面白い仕事は中小企業でこそできる。

効率ファースト
ではなく
ローカル
ファースト

持続可能な堅い地域経済をつくりたいのであれば、中小企業をじっくり育てるべき。

お金だけではなくて、もっと幅広いリソース、人や物が循環する社会にしていきたい。

サーキュラーエコノミーへの移行が一つの大きな方向性だが、兵庫でどういう仕組みや制度を作るか考える必要がある。

10 循環する地域経済

豊かさの定義が変わり、顔の見える経済が求められている。人口は減っていくのだから、より楽しく人口減少していけばいい。

面白い個人商店を増やすことが大切。個人企業、中小企業にもっと手を差し伸べてほしい。

地方経済をある種の護送船団方式のような形で地域の中で守り育てていくことが大切。

地域の商店から買うことでその店を応援する「応援経済」がこれからは重要だ。

顔の見える
経済が求め
られている

消費者がモノやサービスを地域の中で賄うというマインドになれば、画一的な大量生産・大量消費の市場を淘汰できる。

地域の中だけで頑張るのではなく、他の地域から多様なことができる人が入って力を合わせて運営していくことが必要。

地域の中で作ったものが地域の方に買ってもらえる仕組みというのは素敵だと感じる。

お金にならなくても、少し地域が面白くなる活動が増えれば、いろんな課題解決が進む。

地域課題をビジネスで解決し、地域内でお金が循環することで、自分たちで地域をつくることにつながればいい。

ビジネス的な
手法で
共助の形を
つくる

これからは共助が強い地域が生き残る。それをボランティアで支えてきたのがこれまでだとすれば、これからはビジネス的な手法で持続可能な共助の形をつくっていくことが大切だ。

お金中心の経済から脱却するビジョンを示したら、それに共感する若者が集まってくるはず。

共同作業をみんなでやっていく社会をつくりたい。それはお金との決別とも言える。

日本でダイバーシティを担保するためには自ら世界の情報を取りに行くこと、自分が外国人になったつもりで考えてみる必要がある。

大学が多すぎる。もっと専門学校などで、ものづくりの人材を育成しないと将来が危うい。

企業を守るのではなく、同一労働同一賃金の徹底など労働者を守る産業政策への転換が必要。

みんなで
リスクを
シェア

仕事をする組織は労働者組織のようなものが主体になっていくのではないか。経営者だけがリスクをとるのではなく、みんなでリスクをシェアする仕組みが確立されていってほしい。

ワーカーズコープは女性の働き場所や地域の問題解決の一つの受け皿になり得る。

ワーカーズコープが地域の様々な課題を解決する一つの糸口になるのではないか。

どんな農業を
めざす？

都市近郊では、

鮮度感に特化した品目を生産するなど、

土地のポテンシャルを

もっと生かすべき。

11 進化する御食国

農業のイノベーションの方向ははっきりしている。いかにおいしいものを人の手をかけずに効率的に作るか、それをいかに直接消費者に届けるかだ。規制の撤廃も含めてこれを徹底できれば農業は主力産業になる。

兵庫はもっと農業で稼げるはず。デジタル化で大きなイノベーションも期待できる。農業を産業政策のメインに据えるべきだ。

農業を
産業政策の
メインに

今後日本の食料自給率の低さがシビアな問題になる。日本は大型化、スマート化すれば、もっと農業で稼げる国になれる。

法人化して軌道に乗れば、必ず大規模化に移行していく。優良農地を集めて一気に耕作するという風に自然となっていく。

農業政策で金持ちしか買えないような高級食材に力を入れるのは違うと思う。

11 進化する御食国

大事なものは、何人来るかではなくて誰がくるか。1人でやっていく人ではなく、100人雇える人材に来てもらう必要がある。

産地を作るべきなのにも関わらず、今はいろんな作物がごちゃ混ぜになっている。その構成自体がおかしいという認識をまず持つべきだ。

果樹にしても何にしても産地は集中している方がよい。

兵庫の農業の
戦略がほしい

スペインのサンセバスチャンがすごいというが、淡路島もそのようになれる可能性がある。

五国それぞれ食材も違って豊富なので、一流のシェフが県内を巡回しながら、各地の食材を使って新しい料理を作り、地域の人と一緒に楽しむシェフインレジデンスができないか。

11 進化する御食国

小規模で小さく光る農業もしっ
かりつくっていくことが県全体
の中では大事な視点である。

地元の旬のものを食べると移動
のコストと余計なエネルギーを
使わずに済む。

小規模で
小さく光る
農業もつくる

大規模化だけでなく、兼業農家
や自給+ α で農業をしたい人と
の共存もめざすべき。

旬のものは健康にいい。弱点は
その時一斉にできるので、食べ
飽きる。だが、それが自然の理
にかなっていて、エネルギーも
余計にかからず、結局楽である。

11 進化する御食国

遠くに送るのではなく、地元で活かす社会にならないといけない。そして規格外も生かす。

新鮮な農産物が入手しやすい環境が整い、地域の農家と交流する機会があり、地元食材に興味を持つ人が増えていて欲しい。

兵庫の豊かな食文化を残していきたい。例えば山菜を使った料理教室や学校での山菜狩り体験、給食での山菜提供など、小さい頃から山菜を知る取組を行っていく。

遠くに送る
のではなく
地元で活かす

兵庫でちゃんと栽培したら大産地になれるのに、最初から地産地消では、自分からハードルを下げているようなもの。主従を間違っはいけない。

スーパーで売ってもらおうという発想自体が古くなり始めている。スーパーで買い物する時代は近いうちに終わる。

11 進化する御食国

夢は、農業を面白いと思う人を増やすこと。物を作ることから経営までできる。やったことが結果にそのまま出るところも面白い。

自分で育てた野菜を食べる楽しみを感じたり、仲間へ分け合ったりすることで、人とつながり、農業を通して生きがいを感じることができる。

農村は今後圧倒的に女性高齢者が一人で住んでいる社会になる。風通しが良くなり、封建的な雰囲気ガラッと変わる可能性がある。

農業を軸に
面白い地域を
つくる

農業で生産者、生活者、いろいろな分野の人たちがうまくつながれる仕組みを作っていくことが大事だ。「助けて」と言える関係を作っていく必要がある。

助け合いながら農業ができるコミュニティがあればいい。

農家同士のつながりができれば、もっと雇用がしやすくなる。

11 進化する御食国

兵庫県は日本海と瀬戸内海という2つの海に面しており、多種多様な水産物が獲れる場所。海の豊かさを守ることをより重要視すべきだ。

豊かな海と言われた瀬戸内海の漁獲量が激減している。要因は栄養塩不足だけではない。温暖化の影響で、南方系の生き物が侵入するようになった。

海の
豊かさを
守る

絶滅危惧種を救うというような形で、兵庫が最先端の養殖技術で世界をリードするようなことも考えたら面白い。

イカナゴの不漁や森林の荒廃に心を痛めている。

11 進化する御食国

徹底したDXで一次産業の固定概念を払拭してほしい。農村の魅力も向上させることができる。

スマート農業が発達し、手間のかかる作業は機械が担っている。ベテラン農家のノウハウがAIに蓄積され、若い人でも農業を始めやすくなっている。そんな姿になるだろう。

農業をデジタル化して魅力をも高めることも重要。豊かな自然が若い人の活躍の場になることを期待。

農業を
デジタル化
して魅力をも
高める

スマート農業は土に触る大切さを否定するものではない。テクノロジーできちんと基盤ができれば、自然の土にさわる農業の方も、もしかしたらもっと良くなるかもしれない。

農業ロボットの活用を期待している。ロボットの活用が進めば、休耕田なども活用されるのではないか。

11 進化する御食国

高度で高額なロボット技術ばかりでなく、もっと身近で、安価に導入できるようなレベルのスマート農業を求めたい。

自分の手で土を耕すことに価値観を持っている若者も多い。スマート農業とかフルオート農業といったハイテクは、人から豊かさを奪ってしまうこともある。

どんな人でも
働きやすい
農業に
変える

スマート農業は儲けるためよりも、どんな人でも働きやすい農業に変えるためにこそ必要。

スペースがあったら各家庭で簡単に作物を作れるような技術の普及も大事だ。

11 進化する御食国

食料自給率を高めるために効率化する必要がある、工業化していかないといけない。空き地に大規模ハウスを作って水耕栽培を行う。こうした都市農業を産業化すべきだ。

食べられる農作物であっても商品価値がないことにより、やむを得ず廃棄する場合がある。それらが流通して有効活用される仕組みを作らないといけない。

誰にでも
食料が行き渡る
社会へ

誰にでも食料が行き渡る社会を行政も考えないといけない。

賞味・消費期限が近い食品は県内で衛生的に分配される。期限が切れた食品は肥料として再加工され県内の食糧生産に利用されることで、地産地消の一助となり県内での食の循環を促す。そんな未来をつくりたい。

どんな移動手段
を望む？

60kgの人を運ぶのに2tの鉄の塊が動いている。

未来の交通を考えるときは、

もっと環境にやさしい、ヒューマンスケール、

ヒューマンスピードの乗り物を大事にすべき。

12 活動を支える確かな基盤

バスの便数が減って使い勝手が低下している。高速道路の整備よりも、利便性の高い公共交通機関の整備が重要だ。

高齢者が運転免許を返上しなくてもよい県になってほしい。年を取って運転をあきらめた途端にシルバーカーしか選択肢がないというのは悲しすぎる。

間違いなくITインフラの差が地域の差につながる時代になる。

高速で快適
以外の選択肢

道路政策の頭の切り替えが必要。「高速で快適に走る道」以外に、車が減るのに合わせて車線を減らすことも含め、コミュニティが育つ道、コミュニティが育つ交通を考えていく必要がある。

通信の発達により、距離の概念が終焉すると言われてきたが、実際は、通信で情報量が増えた結果、face-to-faceのコミュニケーションの価値が高まり、移動が増える結果になっている。

12 活動を支える確かな基盤

高速道路が整備され、姫路、福知山、豊岡が通勤圏になったが、逆に和田山が通過点となっていく可能性がある。

交通の便が良い駅近に高齢者も含めて人が集まっている。ニュータウンをリニューアルして市内で人口を流動させたいが、明石や西宮などに出て行ってしまいう流れが強い。やはり駅前再開発の力が大きい。

「駅」が鍵
駅前再開発の
力も大きい

今は役場周辺から鳥取中心部まで30分程度だが、6年後に高速が全線開通すれば、更に短縮される。鳥取は町内と同じという感覚になるだろう。

やはり「駅」が鍵だった。駅の近くに住むスタイルに合わせて、駅を中心としたまちづくりを今からでも始めないといけない。

今元気なのはJR沿線の自治体。JR神戸線沿線の地域は残っていくだろう。

12 活動を支える確かな基盤

職住近接の流れがあるので、自転車通勤のしやすさは一つのポイント。自転車の走行環境を整備して、自転車で暮らせるまちを打ち出すことも考えられる。

環境にも健康にもいい交通手段である自転車で快適に走り回れる道路網が整備されている兵庫県をつくってほしい。

自転車で
暮らせるまち
を打ち出す

ゆっくり移動するという価値観が広がらないか。

コロナ禍で自転車通勤の人が増えたことを契機に、安全な自転車専用道の整備に力を入れてはどうか。

自転車をバスや電車に乗せられるようにするなど、自転車で県内をどう動きやすくしていくかということをもっと考えないといけない。

12 活動を支える確かな基盤

土砂災害や河川氾濫、津波の危険がある区域の開発規制を強化するなど、防災はまちづくりから見直すべき。

国土強靱化は、投下する資金に対する効果に疑問を感じる。社会としての危機管理対策を日頃から練って準備しておくことの方が重要だ。

過疎地域を集約し、人はより安全な場所に居住するようにすべきだ。

危機管理対策
を日頃から
練って準備

災害が起こったとき、必ず地域住民との助け合いが必要になる。スムーズに助け合いができるよう普段から、地域コミュニティを大切にする社会にしたい。

ハードだけでなく、協働、支援、助け合いで安全の基盤を確立する必要がある。

12 活動を支える確かな基盤

次の危険なウイルスが出たときに、私たちがどのような生活をめざして適応していくのかという視点は、二度と震災や水害を起こさない地域になるということと同等に重要な項目だ。

次の危険な
ウイルスにも
備える

世界に誇る医療産業都市があるのに、なぜもっと早くワクチンや治療薬ができないのか。

自然災害だけではなく感染症に対する危機管理も重要と気付いた。コロナ禍の経験を活かして防護用品の備蓄やノウハウの蓄積をすべき。

どんな暮らし方を
めざす？

使い捨てるモノに囲まれた暮らしではなく、

少ないモノを大切に使い続け、

お金より心の余裕を大事にする暮らしを

めざしたい。

13 カーボンニュートラルな暮らし

「循環」や「再生エネルギー」の分野で世界中が動いている。この分野でトップランナーをめざすといったことをもっと意識した方がよい。

金持ちになって様々なモノを手に入れるのが豊かさだと思える一方、金をかけないで生活する、金のために働く時間をできるだけ小さくし、むしろ楽しみながら役に立つことをやりたいという人が増えるだろう。

循環、再エネ
でトップを
めざす

家の庭が広く、家庭菜園ができる。野菜くずなどはコンポストで再利用して生ごみを減らす。そんな暮らしが当たり前になってほしい。

環境負荷の低い素材である地域木材を利用した生活をしている。家は木造で、木材やセルロースファイバーでできた日用品を長く大切に利用する。そんな暮らしを広げたい。

地球環境を守ることが、生き物や人間を守ることにつながる。

13 カーボンニュートラルな暮らし

今の生活は不要不急の「贅肉」にまみれている。それぞれがシンプルな生活を心がけるような世の中になるべき。

限りある資源を守るためにも、必要なものだけを選んで買い、食品などのロスをなくしたい。

一人ひとりが簡単なことを守れば、それが積みあがって自然環境保護につながる。

シンプルな
生活を
心がける

大人だけでなく、子どものころから自然について学ぶことにより、環境も変わっていくのではないか。

みんなが自然や環境に目を向け、世界的な課題を自分事として考えていかなければならない。

13 カーボンニュートラルな暮らし

自然エネルギーを活かし、天然資源を計画的に使い、皆が社会へ感謝しながら働く、そんな新しいライフスタイルを模索する必要がある。

まち全体でその地域の特性を活かした自然エネルギーを使う社会に変えていきたい。

利用者の減ったゴルフ場を太陽光発電所にすればよい。

自然エネルギー
を活かす

自然を破壊するメガソーラーは禁止すべきだ。

電気を使わない生活を楽しむ文化を育てていくべき。

ドイツのシュタットベルケこそ日本の地域でやるべきことだ。これを一つ事業として走らせ、そこを拠点に住民サービスを提供する姿を作りたい。

13 カーボンニュートラルな暮らし

自然には「美しさ」の側面も当然あるが、生物多様性、生態系サービスなど、自然の持つ多様な価値にきちんと目を向ける必要がある。

多様な共生関係が築かれた生態系は安定性・復元性のある環境と考えられ、人間も含めて非常に住みやすい環境と言える。

人間も自然の一部であることをもう一度自覚し、自然との共存を考え直すべきだ。

自然の持つ
多様な価値を
知る

ブルーカーボンとして海藻などに炭素を固定する海の機能がこれから大きく見直されていくはずだ。

尼崎100年の森は、公害を出していた火力発電所が森になったもの。そういう事例を増やしていくべきだ。

農業は多様な役割を担っていて、そのワンノブゼムとして食料を作り出しているという面がある。農業はもっと大きな位置付けで考えることが重要だ。

13 カーボンニュートラルな暮らし

地域材が地域で回るようなサプライチェーンを構築して、環境に優しい社会システムをつくり、内外に発信していきたい。

県産木材を活用し、都市部でも木材に触れる機会を高めることができれば、林業を活性化することができる。

県産材を使った暖房を推進してほしい。

地域材を
地域で回す

奥山の杉・檜を伐採し、広葉樹、照葉樹の森に変えよう。

里山を整備することで、自然災害も獣害も軽減でき、海も元気になる。

山を良くすれば、川や海のプランクトンが豊かになる。地域を守ろうとすれば、山を守らないといけない。

どんな暮らし方を
望む？

五国の多様性を活かし、

ライフステージや個人の志向に応じた

いろんな働き方、暮らし方ができる

兵庫県をつくってほしい。

14 分散して豊かに暮らす

東京一極集中が一向に是正されない。国を信用しない、東京の方を向かないという決意があってもよいのではないか。

東京の突出度合いがどんどん著しくなり、一国二制度のようになっている。

コロナ禍の後も都市への人口集中は進むと思う。

大企業が都市部に会社・社屋を集中させ、そこに労働者を集める方式は改めるべき。

都市への
人口集中が
進む

地方に予算を投入するより、都市に集中投下したほうが地域は活性化する。

人口の移動はフリーなので、都市から地方に移動させようとしても、都市より大きな魅力がなければ地方には行かない。

経済が非物質化すると、人とのコミュニケーションから生まれるアイデアが経済価値を生む要素が強くなるので、都市集中が更に進む可能性がある。

14 分散して豊かに暮らす

年齢によって住む場所を変える
みたいなことを学生たちは考
えている。定住すること自体に重
きをおかない世代が多くなって
いくのではないか。

人生の岐路に立った時、兵庫県
に帰るといふ選択肢があると思
えるかどうかは、そこで自分の
人生を賭けられるかどうかでは
ないか。

自由に人が移動できるようにな
れば、住む場所を選ぶ基準は
「どこ」ではなく「誰と」住む
かになる。

定住に重きをおかない世代
が多くなる

今の人は住む場所を決める時に、
結構適当に選んでいる。本当に
したい暮らしをもっと考えて住
む場所を選ぶようになるのでは
ないか。

気の合う仲間がそれぞれの車
(部屋)で集まってきて、乾杯
してまた去っていく。そうした
お金のかからない結婚式や葬式
をする人が増えていくだろう。

社会の変化と家族構成の変化に
応じて、いい条件があれば、す
ぐに住む場所を変える人が増え
ると思う。

14 分散して豊かに暮らす

都市も田舎もそれぞれの地域が自立して、それぞれが互いを補完し合うという姿がよい。

都会も田舎も捨てない、両方手に入れる、良いところ取りしたい。

都市と田舎が
補完し合う

南海トラフ地震などの大災害のときに、田舎は大阪や神戸など都市のバックアップができる。そうした役割分担や連携をつくっていくことが重要だ。

都市と田舎が共に発展する必要はない。あえて発展しないことを魅力にしながら、便利な田舎をめざすべき。

開発しないことで、自然が残る。その自然があってこそ、地域の発展や生活に必要なモノを得ることができるのではないか。

14 分散して豊かに暮らす

これまで田舎イコールダサイだった。そのこと自体を変えないといけない。

どこにいても最新の情報に触れ、学べる時代だ。田舎が田舎なのは、環境の差ではなく、情報を取りに行かずにテレビか自分の身の回りで得られる情報で済ませていることによる。

すべての人に
開かれた田舎へ

田舎というと閉鎖的なコミュニティのイメージがある。すべての地域がすべての人に開かれた場所になってほしい。

田舎の開放性が大きな課題。不便だからではなく、排他的、保守的だから若い人が出て行く。多様な人々が集う新しい田舎を実現したい。

田舎が開放的になることができれば、必然的に都市から多様な人が移り住むようになる。

14 分散して豊かに暮らす

ものづくり県でありながら、瀬戸内海、日本海に面し、食材が豊富。自然豊かでリモートワークやサテライトオフィスに適した環境もある。この兵庫の強みを活かすのが「分散」だ。

自然を感じられて都市のメリットも享受できるのが、東京でも大阪でもない兵庫の良さ。自然と都会の融合を強みとして生かす手立てを考えるべき。

兵庫の特徴は
自然と都会の
融合

疎であることが足枷にならず、疎の人と密の人との分断も生まれない。そんな社会が望ましい。

都会に住まなくても仕事ができる時代だ。兵庫は仕事と自然の中での暮らしを両立できる県だ。

高速通信環境によって、国内外とつながるテレワークが県内どこでも可能になり、職住が融合する地域として世界的に名の知られた県になってほしい。

14 分散して豊かに暮らす

自然と共にある暮らしが人間の基本的な暮らし方であるはず。

自然と共にある暮らしをしているが、周りでは廃屋と休耕田が増えるばかりだ。

物質文明を追いかけることが良い社会につながる道という幻想が未だに生きている。

自然と共にある暮らし

住宅を間引いて過密を解消し、自然を増やすことで都会の殺伐とした雰囲気が緩和できる。

大切な森林が一部以外荒れ放題。森林従事者を育成し、生業ができるようになっていくことが重要。

箱モノの開発を減らし、中長期にわたる自然回帰に投資を振り向けるべき。

自然、地球環境、人の心、暮らしなど、いろいろなものが「調和」する暮らしがもっと広がっているといい。

14 分散して豊かに暮らす

農業をみんながやることで、生きがいを得られ、リズムカルな暮らしにもつながる。

手をかけた分だけ応えてくれる野菜

県民皆農、みんなが農業のプチ知識を持ち、実践するようになれば面白い。

手をかけた分だけ応えてくれる野菜があって、それが生きがいや安心、自己肯定感につながっている。

14 分散して豊かに暮らす

田舎には、素朴で柔らかな雰囲気があって、地域に心を開いて思いやりを巡らせていくような、利他的な価値観を感じる。

都市から見れば、田舎の広い庭でゆったり過ごすことに大きな価値があり、そのような生活がこの地域ではできる。

田舎の山の中で、家族で農業を営む暮らしは、外の人からは、見ると癒やされる、ほっとすると言われる。

田舎こそ
クリエイティブ
の集まり

今まで田舎がデメリットだと思っていたことがなくなり、田舎の住環境の良さが見直される時代が来る。

都市だと何でも買えばよくて、与えられるという環境があるが、田舎は自分で考えて自分で作らないといけない。田舎こそクリエイティブの集まり。

今の若者には、課題が山積している地方こそフロンティアだ。

14 分散して豊かに暮らす

お金をかけずに気軽に別荘を持てる社会にしたい。選択肢として可動する家もあるし、そこにいくのに、自転車やミニバイクを使うなど、お金のかからないアクセスの方法もある。

安いマンションを買ってリノベーションして住む。モノは少なくてよい。本やレコードは全部データでよい。コストをかけずに「軽く住む」という方向性が生まれている。

持ち家にこだわる意識の変革が必要。

気軽に別荘を持てるように

戸建て庭付き駐車場付きか職住近接かという対比で考えると、今伸びているのは職住近接のライフスタイルに対応できているまちだ。

職住近接が子育てには大事。通勤時間は結局ロスでしかない。職場の近くで安心して子育てができる、そういうまちをめざしていく。

脱炭素の観点からは、遠距離通勤を要する集住型より、職住近接の分散型の方が望ましい。

14 分散して豊かに暮らす

ワーケーションは、新たなビジネスを起こせるとか、イノベーションを創出できるといった価値が認められないと長続きしないだろう。

ワーケーションが、やる人にとって意味があるだけでなく、地元の若者たちがビジネスを創出するきっかけづくりになれば面白い。

自然と共生することに価値を置く時代に合った選択肢を、働き方としても選べることはすごく意味のあることだ。

自然に近い
ロケーション
で働く

自然が近くにあるロケーションで、あらゆる場所でリモートワークができる、魅力的な中心部もある、このような空気感、イメージを打ち出して事業者の誘致をした方がいい。

リモートワークが広がるなか、都会へのアクセス、自然との共生、多様な第1次産業など、時代に合った生き方・働き方の選択肢を示すことが大切だ。

テレワーク中心になりつつある現在、都会に住む必要性を感じなくなってきている。

14 分散して豊かに暮らす

成り行き任せではニュータウンの再生は進まない。行政が入って、機能集約と自然再生を含めて計画的に維持更新を進める必要がある。

国が考えるコンパクト化は絵に描いた餅。コンパクトにできるところはもうしている。

都市機能は集中している方が縁辺部に住む人にとっても便利。

機能集約と
自然再生
を考える

集落が無人化してそのままになっている。原野に戻るだけかもしれないが、空間管理の面から考えると、まばらでも人がいる方が地域の保全につながる。

まばらに人が住み続ける将来を考えたとき、問題は水の確保。ぽつんと山奥に一軒家という場所が徐々に増えていく。奥地でも、家があったら水道は引いておかないといけない。

14 分散して豊かに暮らす

問題は公共施設や道路・橋の更新が追いついていないこと。そこをきちんとやらないと人を呼び込むこと自体できない。

人口が減っても道路、上下水道、情報通信は守っていないといけない。なかなか表に見えないが、持続可能なまちという意味で本当は一番大事な部分。

課題の一つは老朽化が進む公共施設の維持更新。将来世代に過度の負担を残さないことも住みやすいまちの大事な点だ。

公共施設の
維持が課題

人が減って自然とコンパクトになっていく中で、利便性、教育の質、子育て環境など核となる部分をどうやって維持していくかが課題。

これ以上開発をせず、空き家を有効活用して快適で安く住めるまちをつくるのが大切。

14 分散して豊かに暮らす

空き空間が使えるかどうかの分かれ目は「人の交差点になっている」かどうか。空き家を単純にリスト化するのではなくて、可能性がある場所とない場所の仕分けが必要。

日本各地の若年層から、移住先の第一候補として挙げられる地域をめざしたい。

その土地にはこういうストーリーがある、ということが住む場所を選ぶときの決め手になる時代が来るのではないか。

その土地が
ストーリーを
持ち交流が
循環する

移住のキーワードは愛着、ストーリー、循環。地元住民も、訪れる都市住民もその土地に愛着を持つ。その土地がストーリーを持つ。交流が循環する。この3つが大事。

お客さんが来ることで、地元の人が元気になる。都会の人は普段触れることがあまりない地域の温かみに触れられる。こうした交流の循環を広げたい。

14 分散して豊かに暮らす

子どもたちは都会に目が向いている。大人が楽しく生きている姿を見せて、田舎はいいところだということを教えていかないといけない。

大人が地域で楽しんでいる姿を見て子どもが育てば、出て行ってもいつか戻ってくるということもあるのではないか。

子どもの頃遊んだ公園、学校帰りにいつも立ち寄っていた食堂・喫茶店、通学路の景色、漁師やおじいちゃん、おばあちゃんが井戸端会議する風景を見たときに、いいなと感じる。

大人が楽しく
生きる姿を
見て育つ

子どもたちは一旦外に出て、いろいろな技術を身につけて、地域に帰ってくる。その技術を地域で生かすということをやらないと、いつまで経っても地域は良くなるらない。

若者が進学、就職で外へ出て行くのが問題というが、自分の子どもは地元に残らず、外に出て行ける人間になってほしいと思っている親が多いのが現実。

14 分散して豊かに暮らす

移住で盛り上がっているところは、そこにいる人たちがどれだけ楽しんでいるかということだ。

伝統や文化を残す一方で、やりたいことが実現できる田舎にならないといけない。

下手でも自分で作り上げていける喜びがあって、それは何ものにも変えがたい。

こんなまちに
したいに
チャレンジ
できる

特色ある伝統行事を守り、自分自身の「地元」をつくるために住む人全員が主体的に関わりながら生活していく姿が望ましい。

ちょうどいい距離感でほっといてくれるまちがいい。ある意味で自己中心的に「こんなまちにしたい」にチャレンジできる雰囲気や自然にデザインされていることが大切だ。

都市からいかに若者や創造的な人材を送り込み、双方向の交流の中で、両方が良い関係になって発展していける状況をどうつくっていくかがポイント。

14 分散して豊かに暮らす

もはや行政が公共サービスで地域を支える時代ではない。市民が自分たちの力で地域づくりしないと地域社会が良くなる。

農作物の地産地消、堆肥なども含めたエネルギーの地産地消、デザイン・アートの地産地消など、いろんな地産地消を地域で進めていくことが大切。

自分たちの力で
地域づくり

キャンプでのたき火や住宅の薪ストーブのための薪を集めたり、有機農業の肥料を作るために落ち葉を集めたり、里山が地域で有効利用されている未来をつくりたい。

その土地の歴史や文化、風土が地域住民主導で保存・活用されているようなまちづくりがなされていることを願う。

コロナ禍でマスクの入手が困難になった経験から、地方の製造業を見直して、復活させ、生産地を地方に分散する工夫をすることの大切さを痛感した。

14 分散して豊かに暮らす

自然が織り成す風景や、そのまち固有の雰囲気を引き継いでいかないといけないと感じた。

ICT化が進むなかで自然と触れ合う機会が減ってきた。自然豊かな兵庫で自然の大切さを感じながら生活していきたい。

子どもを持てば、例えば、自然体験を行える場所へ移り住み、自然を肌で感じ、子どもの発育、発達に良い影響を与えるような場所で暮らしつつ、仕事を続けていくことが希望である。

自然を
肌で感じて
暮らす

田舎だからこそデザインにこだわるべき。豊かな自然におしゃれな施設があれば最強のコンテンツになる。

大事な今は今ある都市をどう変えるか。都市内にオープンスペースや自然との共生空間をどう埋め込んでいくかという話をすべきだ。

身近な自然を楽しむロングトレイルを整備しよう。

14 分散して豊かに暮らす

どこに行っても同じチェーン店ばかりの風景だと思う。

道を中心に人にやさしいまちを作っていきたい。

歩きたくなる
ウォーカブル
シティに

三宮をはじめとした主要駅周辺
の環境整備が肝要。

居心地が良く、歩きたくなる
ウォーカブルシティになってほしい。

14 分散して豊かに暮らす

「定住」を議論することに意味があるのか。住民票をどう考えるのかという話も必要。

人が減っても暮らせるまちという意味では、役所自体を少ない人数で回せる体制にすることも大事。機械にできることはどんどん機械に任せていく。

一つの自治体で完結というよりは、広域的な連携の中でどう持続させていくかを考える必要がある。

開かれた
自治体へ

もっと開かれた市役所にならないといけない。受益者負担の考え方も示しつつ、全部オープンにして、一緒に考えて決めるスタイルが求められている。

自治体が自ら変わっていかないと社会との差が開くばかりだ。

ICTを駆使して直接民主主義的な運営をめざすべきだ。

どんな産業を
伸ばす？

環境・エネルギー、デジタル、

健康・医療、航空・宇宙など

成長分野を伸ばさないと、

未来はない。

15 社会課題の解決に貢献する産業

デジタルの世界でビジネスを拡大し、海外輸出に力を入れるべき。最新の医療技術も海外に輸出できる。

人材が集まらないところには世界の投資マネーも回ってこない。もう少し先見性のある産業構造の形成を考えないといけない。

先見性のある
産業構造の
形成を

水素も、航空機も、健康医療も兵庫には素地がある。

エネルギーの世界は、トップを走らないと意味がない。一番手が総取りすることになっている。

水素産業推進の大きな意義は、船舶やプラントなど、それを支える中小企業の仕事が広くあることだ。

15 社会課題の解決に貢献する産業

医療産業都市について言えば、点と点の動きではなく、そこから新たなワクチンが出てくるようなスケールを持った動きをしていくべきだ。

全自動のロボット手術機の発明や、遠隔操作により操縦可能なロボット手術機の拡充が進み、地方にしながら最先端医療を受けられる時代が来るだろう。

人間中心
生命に
フォーカスを
あてる

人間中心であることが大事で、生命にフォーカスをあてるべき。人間や生命が中心であって、その周りに農業や産業がある。

健康を科学することで、長寿社会を支える新たな産業が生まれるはずだ。

15 社会課題の解決に貢献する産業

スーパーコンピュータを中心とした最先端技術を活かしてより安全安心で快適なまちをつくり、日本だけでなく世界をリードできる場所になってほしい。

科学技術基盤、研究機関、人材の集積を最大限に活用し、産業界における科学技術を活用した新産業・新技術の開発促進とイノベーションの創出に向けて取り組んでいる。

ハードからソフトへ、形あるモノに依存する産業からの脱却が必要だ。

最先端技術で
日本、世界を
リードする

「多くの社会課題を持つものの果敢に現状を打破する力強い県」というブランドを構築できれば、県内外の人にとって兵庫県は魅力的な県になるだろう。

先進事例を兵庫県から生み出すことで、時代を生き抜く若者が集まる地域となるだろう。

物の消費は縮小する。少なくとも適正規模にまで落ちていく。GDPの成長は、非物質的な経済価値の増大が支えていく形になるだろう。

どうやって
実現する？

「楽しく」を重視して、

小さな「やりたい」を実行し、

実行する人を応援する。

そうした社会にぜひなってほしい。

形式的な連携ではなく、互いが能動的になれるような、仕事や研究の枠を超えた人間同士の密な関係をつくるのが大切だ。

同じ課題を抱えている者同士みんなで手を組んでやっていく、そういう発想をベースにできるかどうか非常に重要。

小さな人間が知識や地域共同体のネットワークをできるだけ密にして、集合体として危機に立ち向かうことが生存の策だと感じた。

人間同士の
密な関係を
つくる

民間との協働領域、半分ビジネスみたいな領域に大きな可能性がある。従来の自治体の殻を破らないといけない。

画期的な施策でも受容されないとうまく行かない。あらゆる関係者を巻き込んで推進してほしい。

行政の発想が古すぎる。アップデートが必要。地方一つでできることには限界がある。みんな抱えている問題は同じようなことなのだから、全国の地方がもっと手をつなぐべきだ。

県の役割として、市町ができなくなってきた投資と、市町では抜け落ちる狭間の部分の両方に目を向けることが大事だ。

県に期待する役割は個々の市町がやっていることをつなぐこと。

やりたいこと
をやれる環境
をつくる

ビジョンは市町の中の校区単位、集落単位の取組とも関わってくるので、そうした小さな組織の中で展開できるあり方を考えることも大切。

行政は、官主導でやるよりも、民間でやっている魅力的な取組をどんどん発信したり、場所を提供したりすることをしていくべき。

まちづくりにおける行政の基本的な役割は、いろんな制約をうまく調整して「やりたいことをやれる」環境を整備することだ。

スピードを持ち、貪欲な学びをセットで進めることが大切だ。

私にとって地域活動は遊び。地域活性化が目標になると楽しめないし、長続きしない。

DIYでリノベーションを楽しむ地域になればよい。

広報自体に労力をかけない。それよりもやることの中身にエッジを立たせること。そうすれば自ずと記事になる。

実験しながら
修正していく
方が面白い

最初から作り込まない。小さく始めて実験しながら修正していく方が面白い。大事なの中身であり、自分なりのこだわり。

若い人は小さいイベントを仕掛けて実績を作っていく。自分たちで練習ができて、どんどんできるようになる。それを許してくれる環境をつくるのが大事。

面白ければ人はついてくるし、集まってくる。仕掛け方次第だと思う。

まちづくりでこれから大事な
のは、他人任せではなく、自分ら
で考え、自分らでやることだ。

住民が自分たちで地域を支えて
いかないといけない時代が来て
いるのに、今の日本には、その
仕組みや枠組みがない。その形
を作ること自体が大きな課題。

身の回りからワイワイやり始め
たら、何をしたいかわからな
かった人たちが寄ってくる。そ
うやって地域は変わっていく。

他人任せでは
なく、自分で
考え、自分で
やる

それぞれの場所で最初の一步を
踏み出す人が増えたら、住みよ
い地域が増えていくと思う。

外ばかり見て、あれもいいな、
これもいいなと言っているだけ
でなく、一人ひとり自分の身の
回りから行動しよう。

住民が自分たちの地域をどう
やって良くするかを意識するこ
とが大事。住民起点が基本。

足元の地域の課題一つひとつの
解決に地道に取り組むという姿
勢がやはり大切。

いくら便利になっても、AIが出てきても、僕らは人間。要は心の持ち方であり、愛という言葉がテーマになるのではないか。隣の人を助けることから始めないといけない。

いくら便利になっても
僕らは人間

2050年はDXが進んでいるだろうが、デジタルだけじゃなく、人がリアルにつながる未来でありたい。

AI・バーチャルに頼り過ぎず、五感を刺激する兵庫の良さを伸ばす方向を示してほしい。

生み出したプロジェクトを大切に育てることが大事。プロジェクトを生み出すビジョンにしてほしい。

未来を考えるだけではだめ。ビジョンを実現するための行動をどう作っていくかをしっかり考えないといけない。

ビジョンを人の行動変容にどうつなげるかをうまくデザインする必要がある。

プロジェクト
を生み出す
ビジョンに

地域の資源を使って地域で自らを豊かにしていくような組織化をしていく工夫が必要だ。

ビジョンを達成するには大胆な戦略と施策、リーダーシップとスピード全てが必要であることを肝に銘じる必要がある。

個人の自主的な活動を待つだけでなく、市民参加による合意形成の仕組みなど、県民の参加を緩く制度化していくことを考えるべきだ。

兵庫県でやりたいなと若者が思うような制度づくり、雰囲気づくりが多様な形で進んでいく必要がある。

ローカルを志向することと、インターナショナルに世界にチャレンジしていくことの両方に目を向けることが大切だ。

若者たち自身がサイクルを回すことでビジョンが盛り上がっていくような仕組みができれば面白い。

若者が
意思決定段階
から参加

若者が意思決定段階から、まちづくりに加わると地域の活力に大きなインパクトをもたらす。

やったら得だとか、やって当たり前と感じさせるように若者に響く見せ方を考えることが大事。

先導プロジェクトは、的を絞り、尖ったものを強調してやっていくべきだ。

民間あるいは県民からの自由な発案のもと、プロジェクトを構築していくことが大切だ。

民間企業が見てアクションを起こせるようなビジョンである必要がある。

出入り自由
という
気楽さが
不可欠

ビジョンをブラッシュアップしたり、具体化したりしていく、若い人も入ったプラットフォームを作って、地域を盛り上げていきたい。

まちづくり活動には「出入り自由」という気楽さが不可欠だ。

兵庫県の1万分の1のスケールの500人を対象に実際の姿を作ってしまうって実験をして、そこに県民も参加してもらおうとよい。

いろんなことにビジョンを紐づけて、ビジョンを盾にしていろんな活動を応援していく。

自分がどこに手を上げればいいのか、どこにアクセスしたら参画できるのか、県民にわかるようにすることが大切だ。

いろんなこと
にビジョンを
紐づける

人に言うばかりでなく、行政自らも起業家精神を持ち、あちこちでぶつかりながら進んでいくことが大切。

ビジョンは、一人ひとりの住民が見て、使えるものになることが重要だ。

紙は紙であってもいいが、映像や、リモートでの話し合いで伝えていくという道もある。

若い世代は、映像を見てコミュニケーションを取るのが一つのスタンダードになっている。

若者、子育て世代、シニアバージョンなどターゲットを絞って媒体を作った方がいいかもしれない。

シンプルで
理解しやすい
ビジョンに

ビジョンがもっとシンプルで理解しやすいものであることが大事だ。ビジョンが難しいものであると、子どもたちと乖離したものになってしまう。

SNSの信頼度が薄れている。若者のSNS離れが起きていて、紙媒体に回帰している。紙は実態としてあるものなので、それだけ信頼できると彼らは言う

子どもや若い人が、そんな人に実際に会える、そんな地域を体験できるなど、未来シナリオを直接実体験できる機会をつくることも合わせて必要。

魅力的な暮らし方をしている人をロールモデルにして語ってもらおう。そんなビジョンにできないか。

先駆的な試みをやっている人たちがいることを見せて、県全体がそういう未来にシフトしていけると良い。

魅力的な
暮らし方を
している人に
語ってもらおう

ビジョン出前講座の反響が大きかった。将来について考えること自体が、地域社会を良くすることにつながっていると感じた。

地域のこと、未来のことを自分事として学生がしっかり深掘りして考える機会を増やしていく必要がある。

何のために対話するのが大事。若者が語らうことの意味は、未来を描き、実現に向けてチャレンジするきっかけになるということにあるのではないか。

未来について最悪から最高まで多様なシナリオを市民に投げかけ、議論することが重要。

もっと人と社会を信頼できるようにならないといけない。そのためには、いろんな世代の人が垣根を越えて自由に対話しあって、各人が自分の価値観をアップデートしないといけない。

地域を変えていこうと思うなら多世代が集まって、なぜそういう発言を不愉快に思うのかを言い合わないといけない。

いろんな世代
の人が垣根を
越えて
自由に対話

社会の閉塞感を若者が自分たちで議論して、自分たちで変える。

同じテーブルに座り、対話の中で一緒に考え、一緒に決める。話し合うことが大事で、これを誰でも加われるようにオープンにやることがまた大事。

そこに住む誰もが地域づくりに参加し、子どもも高齢者もすべての人が対等な立場で生活する社会をめざしたい。

テクノロジーは変わっても、価値観や文化のレベルはそうすぐには変わらない。

夢のあること
を話せる場が
ある社会

課題があってどうしようだけではなくて、もっとこういうことがしてみたいと、夢のあることを話せる場がいろんなところにある社会にしていきたい。

大事なものは、どういう価値を実現したいか。価値の議論を排除せず、価値を大いに議論できる場をつくることが重要。

自由な発言から生まれる多視点による意見交換を歓迎する雰囲気の醸成が必要。

デジタル技術を用いて住民の声をリアルタイムに拾い、政策に反映させる仕組みはぜひ実現してほしい。

30年後の社会の主流になる若い人たちの生の声を直接聞く場がもっとあってよい。

多世代の意見
が反映できる
仕組みづくり

もっと県民に問いかけることが大事だ。

地域の問題について幅広い世代の意見が反映できる仕組みづくりが必要である。

若者は今やマイノリティで、行政に声が届かない。若者の意見を意識的に聞くべき。

どういう市民を育てるかを考え、きちんとした研修を行う。これを地道に続けることが大事だ。

市民も主体的に学んで、自分たちの思い描く未来を導いていく視点は重要。

市民が主体的
に学び
思い描く未来
へ導く

県民が価値観は違っていても協調、相互理解していけるかがポイント。そのお世話をする人材の発掘、育成や、県民のそうした心を育む環境づくりが必要。

住民主体の学習会が大切。地域づくりで有名な地域は、住民が全国や世界のいろんな地域と自分たちの地域を比べて自分たちの地域に何が足りないか、何が強みかをしっかり学習した上で、意思形成を行っている。

変化し続けるビジョンであることが大切であり、途中で柔軟に変えていくということを明確に打ち出すべきではないか。

変化し続ける
ビジョンに

進行状況を常にオープンにしてほしい。

その時々にあう形で、その都度見直しながら30年後をめざしていくようになるのではないか。